

『江湖風月集略註』研究（五）

禪研究所中世禪籍班

飯塚大展・佐藤俊晃・比留間健一・堀川貴司

はじめに

本稿は前稿に引き続き『江湖風月集略註』に関する校訂と注釈を行った成果である。読書会の参加者は、飯塚ほか、佐藤俊晃、比留間健一、堀川貴司の各氏である。読書会は、はじめに各自が担当者となり、頌一首ずつのレジメを作成し、それをもとに共同で校合の確認と内容理解に関する討議を行ってきた。担当は、以下の通りである。

- (59) 人參太白（飯塚）(60) 虎岩住東林（佐藤）(61) 劍空（比留間）(62) 悼太虚藏主（堀川）(63) 馬郎婦（飯塚）(64) 過錢塘江（飯塚）(65) 送人歸蜀（佐藤）(66) 聽蛙（比留間）(67) 送横川住能仁（堀川）(68) 聽猿（飯塚）(69) 歸鶴（飯塚）(70) 涌壁觀音（佐藤）(71) 涅槃（比留間）(72) 仏母堂（堀川）

【テキストについて】

(1) 底本と対校本

底本 ①京都大学附属図書館所蔵『江湖風月集略註』（以下

「京大本略註」）

対校 ②飯塚架蔵増上寺二念庵旧蔵寛永九年版『江湖風月

集略註』（以下「寛永本」）

(2) 参考史料

【『略註』（林下妙心寺派）系統】

③駒澤大学図書館所蔵『江湖風月集略註』大義写本（以

下「大義写本」）

④飯塚架蔵寛永己酉（十年）版『江湖風月集略註鈔』（以

下「略註鈔」）

【五山系統】

⑤龍門文庫所蔵『江湖風月集抄』（芳郷光隣・彭叔守

仙抄、以下「龍門文庫本」）

⑥成簀堂文庫所藏『襟帶集』

⑦駒澤大学図書館所藏『江湖風月集夾山鈔』（以下、「夾山鈔」）

『洞門抄物系統』

⑧蓬左文庫所藏『江湖風月集抄』（蓬左文庫本）

『林下大徳寺系統』

⑨足利学校遺跡図書館所藏『江湖風月集抄』（「足利学校本」）

『妙心寺系統』

⑩京都大学文学部図書館所藏『江湖風月集訓解添足』（無著道忠抄、以下「訓解添足」）

【翻刻凡例】

- 一、本史料翻刻に際しては、底本には、京都大学附属図書館所藏『江湖風月集略註』（以下「京大本略註」）を用いる。
- 一、底本の翻刻の体裁は、頌の本文を太字とし、注釈の本文は改行二字下げとする。本文の行間や欄外に書写された抄文も、匡郭内の注の後に「欄外注」として翻刻する。傍注に関しては、第一句から第四句を順次A B C Dとして、該当箇所を指摘した後、「傍注」として翻刻する。
- 一、底本と寛永本との校合を行なう。なお、校合に関する注は、「校異」として脚注の形で行う。

一、「大義写本」、「略註鈔」は比較対照史料として、二段組で翻刻する。

一、翻刻に当たっては、異体字・略体字・別体字・俗字等は、現行の書体にて翻字する。省文等も同様である。また、明らかに誤写と思われる部分については、また脱字が明かな場合には、必要に応じて他のテキストを参考にし、注記する。

一、踊り字は、片仮名は「ゝ」、「ゞ」、「漢字は、「々」、「々々」を用い、二字以上の「く」も用いる。

一、合字の「亅」「ㄥ」「𠂔」「𠂕」は、それぞれコト、シテ（シタ）、ヨリ、トキ、トモに置き換えて翻字する。

一、濁音・促音等の表記は、原文のままに翻刻し、敢えて統一ははからない。

一、句読点に関しては、読解を便ならしむるために、適宜これを補う。

0059 人參太白

【京大本略註】

錦州中溪応和尚

(59) 人參^ス太白^一

太白^①、山名也。在明州、太白星下此山、故名之也。太白^③山、在浙東路慶元府鄞縣東六十里。統紀^④云、晉惠帝時、沙門義

興廬於山中。太白化童子、下來供侍、故号天童太白山。又唐開元中、高僧法璿^セ披榛奔建精舍、感天童捧天食來供、云々。

A 掛^レ松^ヲ遭^フ呵^セ匪^ニ熱^{スルニ}瞞^一

B 精金百煉火中看

C 天生^イ兩耳曾無^レ竅

D 閑^ニ聽^ニ松涛^ニ吼^ニ夜闌^ニ

百丈再參馬祖。々々以目睨^ミ禪床角拈子。丈云、即此用、離此用。祖掛拈子於旧処。良久云。尔向後開兩片皮、將何為人。

丈取拈子豎起。祖云、即此用、離此用。丈掛拈子旧処。祖震威一喝。丈直得三日耳聾。後因・槩來參、拈此話。・槩聞拈、

不覺吐舌。太白有九里松。又云、太白門外、二十里有松徑。万松^⑧閑。凝禪師栽二十里松、作山門境致、山外立万松閑。

古詩云、太白峰前万年松、歲寒難此聖人心。又云、二十里松行尽处、青山擎出梵王宮。谷詩^⑩、催粥華鯨吼夜闌。

【欄外注】

太白山、天童景德禪寺。

天童來供侍、或云、已禪師、或昨啓禪師。

唐玄宗開元二十年、初西晉時有僧義興、於鄞縣東西三十里山谷間、六仏祠^⑥於岩上。至是高僧法璿^セ按故迹、造精舍前之東麓。

秘書万斉融建多宝塔于西南隅。師居其处、日誦法華。感太白化天童送供。因号太白禪寺、名其山曰天童。世伝啓禪師開

山者誤也。

抄云、百丈猶被馬祖瞞、這僧不受太白瞞。

跋難陀龍無耳而聞。見于首楞！。

斯人、已是飽參、塞斷耳根、分明聞者也。何必待太白喝。太白ハ馬祖ノ住処力。

【大義写本】

錦州中溪応和尚

昔錦州^{錦州}昔有中溪先生者、此人有名望也。由是又号中溪也。

(59) 人參太白

明州天童寺也。

A 掛^レ払^ル遭^ル呵^セ匪^ニ熱^ニ瞞^ニ

B 精金百煉火中看

C 天生兩耳曾^テ無^シ竅

D 閑聽松涛^ノ吼^ニ夜^ニ闌^ニ

伝^レ灯^録、百丈海禪師⁽⁴⁷⁾載^ル師、一日訪馬祖法堂。祖於禪床角掛^レ払^子示之。師云、只遮个更別有。祖乃放旧処云、你已後將什麼為人。師却取払子示之。祖云、只遮个更別有。師以払子掛安旧処、方侍立。祖云叱之。自此雷音將震、云々。⁽¹⁸⁾雪豆頌此機縁曰、大冶精金、応無^シ變色。⁽¹⁹⁾耳^ノ噪無孔竅底、如何聽松風乎。天童山、太白星下、已禪師安禪于此。太白星化成童子、來供侍、故云太白天童寺也。凝禪師栽二十里松、作山門境致、山外立万松関矣。

【欄外注】

古詩云、太白峰前万年松、歲寒難比聖人心。無^シ竅者、參太白人也。

馬祖道、尔向後開両片皮、將何為人。百丈払、為後如虫禦木、為復啐啄同時、諸人□会三日耳聾麼。大冶精金、応無^シ變色。

太白有九里松、不聞聞中須听九里松風也。又古詩云、二十里松行尽処、青山擎出梵王宮、四句。又⁽²⁰⁾云、此僧無听馬師喝底耳。只到太白可听松風、云々。

【京大本略註】

錦州中溪応和尚

未^レ知^レ法嗣^ヲ。此集不^レ知^ニ法嗣・生縁^ニ人、十七人也。是其一人ソ。

(59) 人參^ス太白^ニ

天童へ行クゾ。⁽²¹⁾大休士寄スト云字ヲ置テ可也。

A 掛^レ払^ヲ遭^ヲ呵^ヲ匪^ヲ熱^ヲ瞞^ニ

馬祖・百丈再參ノ則ヲ引タハ、此僧元ト天童ノ僧デ、今又再參スルカ。掛払トハ、馬祖ノ初メ払ヲ禪床角ニ

掛ケラレタニ、又百丈モ払ヲ掛ケラレタゾ。爰デハ百丈ノ払ヲ掛ケタ処ヲ云ゾ。遭_レ呵トハ、馬祖ノ威ヲ振テ一喝セラレタヲ云ゾ。喝セラレタレトモ、チツトモ熱瞞セラレズ。熱ハ怒_テ而出_レ声_ヲ則、内熱_{シテ}而面発_ス赤_ヲ。熱喝噴拳モ同シキナリ。又太タト云義モアリ。此人ヲ百丈ニ云イナシタゾ。

B 精金百煉火中ニ看_ヨ

此人ガソチヘ行タラハ、百煉シテ看ヨ、変色ハアルマイゾ。

C 天生兩耳曾_テ無_シ竅_ヲ

百丈ハ馬祖ノ喝下デ耳聲シタガ、此人ハ天然兩耳ガ聲シタゾ。ホトニ、百丈ニハ増シタゾ。

D 閑_ニ聴_ツ松涛_ノ吼_{ルヲ}夜闌_ニ

天生無_レ竅耳デ松風ヲ聞カハ、一段面白カラウゾ。利根ナ耳デハ聞レマイゾ。天童二十里ノ松ガアルニ依テ、松涛ノ沙汰ヲスルナリ。

【59】注

(1) 太白山名也。『祖庭事苑』卷四に「太白(四明之天童峰名)」(統藏一一三・五〇b)とあり、中国浙江省寧波府にある太白山(別名天童山)をいう。

(2) 在明州、太白山下此山、故名之也。注(4)参照。

(3) 太白山、在浙東路慶元府鄞縣東六十里。『方輿勝覽』卷七に「天童山(在鄞縣東六十里有寺。下略)」とある。

(4) 統紀云晋惠帝……捧天食來供云々。太白山の由来については、「首書」が指摘するように、『仏祖統紀』卷三十六に「永康中、沙門義興廬于山上。有童子來給薪水。久而辭去曰、吾太白一辰、上帝遣侍左右。言訖不見(今四明天童山是)」(大正藏四九・三三八c)とあり、同書卷四〇に「初是西晋時有僧義興、於鄞縣東南三十里、山谷間立仏祠於巖上。至是高僧法睿、案故迹造精舍於山之東麓。秘書萬齊融建多宝塔於西南隅。師居其処、日誦法華。感太白化天童送供。夜遶塔行道、人見師身与塔齊、因号太白禪師、名其山曰天童(世伝啓禪師開山者誤)」(大正藏四九・三七四c)と見える。この二箇所の内容を要約したもののか。

(5) 百丈再參馬祖……不覺吐舌。この頌の典拠として、「馬祖再參」の話を挙げる。「後來黃檗」以下の文を欠くが、『仏果鑒節録』卷一(統藏一一七・二七a~b)、『正法眼藏』卷三(統藏一一八・c~d)、『五灯会元』卷三(統藏一一三八・四四b)、『建中靖國統灯録』卷二十七(統藏一一三六・c~d)等と同様の文が見える。又、「後來黃檗」以下

の一文を含むテキストに『禪林類聚』卷十六(統藏一一七・c)があるが、「々以目睨^み禪床角扠子」を「相堅起扠子」に作る。

(6) 太白有九里松[〓]典拠未詳。『大明一統志』卷三十八に「靈隱寺在武林山、晋咸和初建寺、有觀風・虛白・候仙・見山・冷泉五亭。唐白居易所謂五亭。相望即此寺外夾道有九里松。(下略)」とあり、靈隱寺の「九里松」に誤るか

(7) 又云太白門外二十里有松徑[〓]『全室外集』卷四に「題天童万松園」があり、「小白市太白峰、二十里松居其中、一徑陰陰翠羽蓋、半空矗矗蒼髯龍、太白之峰分九隴(下略)」

(8) 万松関……山外立万松関[〓]擬禪師は山門へ連なる参道に二十里にわたって松を植えて太白山景德禪寺の境致となし、山外に萬松関を建立した。『仏光国師語録』卷二に「万松関到翠鎖亭前、妙高台到太白峯頂。坦坦蕩蕩、岩岩峴峴。(大正藏八〇・一四一a)と見える。

(9) 古詩云、太白……難此聖人心[〓]『希叟紹曇語録』卷一に、「就座。有僧出礼拜問云、龍頭瑞氣盤空闊、古仏今朝又放光。学人上来、請師祝聖。答云、太白峰前松万本、歲寒難比聖人心」(統藏一二・八〇b)に類句が見える。

(10) 又云二十里……攀出梵王宮[〓]『五灯嚴統』卷二十四「道場木陳道忞」章に「問如何是天童境。師曰、二十里松^{前カ}行欲尽、青山捧出梵王宮」(統藏一三九・五一五b・c)とあり、『浙江通志』卷二三〇、天童山関連記事の注に、「王安石 春日過天章寺詩、村村桑柘録浮空、春日鶯啼谷口風、二十里松行欲尽、青山捧出梵王宮」とあり、同様

の記事が『密雲禪師語録』「年譜」に「蓋天童自晋義興開山、宋宏智中興以来、号江南第一宝坊、故宋舒王荆公有句云、三十里松行欲盡、青山捧出梵王宮」と見える。これによれば、王安石の詩句と言うが、その文集には見えない。

(11) 谷詩、催粥華鯨吼夜闌[〓]黃庭堅、「題淨因壁二首(その二)」に見える句。『山谷内集詩注』卷十一に「門外黃塵不見山、此中草木亦常間、履声如度薄氷過、催粥華鯨吼夜闌(劉禹錫詩、門外黃塵人自走、甕頭清酒我初開。莊子曰、北面而不見冥山。履声見漢書鄭崇傳詩曰、如履薄氷。華鯨謂鯨魚之藻飾者。釈氏要覽曰、今寺院木魚或取鯨魚、一擊清牢為之大鳴也。按文選東都賦曰、發鯨魚鏗華鐘。又潘岳西征賦曰、華魴躍鱗老。杜詩、夜闌更秉燭)」とある。

(12) 天童來供侍……世伝啓禪師開山者誤也[〓]注(4) 参照

(13) 抄云、百丈猶被馬祖瞞、這僧不受太白瞞[〓]ある抄によれば、百丈は馬祖に言いようにたぶらかされたが、この僧は太白山(天童寺)住持にたぶらかされることはあるまいの意に解する。注(15) 参照。

(14) 跋難陀龍無耳而聞見于首楞[〓]『首楞嚴經』卷四に「阿難汝豈不知今此会中、阿那律陀無目而見、跋難陀龍無耳而聽、跋伽神女非鼻聞香、驕梵鉢提異舌知味、舜若多神無身有触」(大正藏一九・二三b・c)とある。第三句に關連して、六根(感覺器官)と六境(その対象)との關係性を越えたあり方を称揚する。

(15) 斯人已足飽參……何必待太白喝[〓]今太白山に向かおうとするこの僧は、既に達道の人であり、耳根を塞いで明らかに音声を聴き得

る人である。もはや百丈のように大喝されて耳を聳する必要など無い。

(16) 昔錦州^(新カ)昔有中溪先生者……又号中溪也。中溪和尚の名の由来について注する。「龍門文庫本」も同様に注するが、曾て錦州の地において声望高かつた中溪先生なる人物については未詳。「夾山鈔」に「中溪ハ不知誰カ法嗣ト云フ。此ノ集中不知法嗣生縁者凡テ十七人、是レ其ノ一人ナリ也」とあるように、中溪和尚の法系も生縁も不明である。

(17) 伝灯録、百丈海禪師……自此雷音将震云々『景德伝灯録』卷六「百丈懷海」章に、「師一日詣馬祖法塔、祖於禪床角取扠子示之。師云、只遮箇更別有。祖乃放旧処云、爾已後将什麼何為人。師却取扠子示之。祖云、只遮箇更別有。師以拂子掛安旧処。方侍立。祖叱之。自此雷音将震」とあるが、この一文に関しては、宋版、元版、明版の諸本間に異同が多い。「夾山鈔」は、典拠として『景德伝灯録』を挙げ、続翠（江西龍派）の「続云、此ノ人必再ヒ参ニ太白長老ニ故ニ用ニ此機縁乎」のコメントを引用する。この僧は太白山（天童山住持）に既に参じたことがあり、今再参することになることから、この再参馬祖の話頭が取り上げられているとする。

(18) 雪豆頌此機縁曰大冶精金応無変色『明覚禪師語録』卷三（大正蔵四七・六八五b-c）、「仏果撃節録」卷一（続蔵一・一七・二二七a-b）等に見える。

(19) 耳塚無孔竅底如何聴松風乎第三四句を注する。句面は、耳に

『江湖風月集略註』研究（五）（飯塚・佐藤・比留間・堀川）

穴が開いていない者がどうやって松籟を聞き得るのかであるが、耳に孔なき者にして始めて馬祖の大喝にもました松籟（真実の音）を聞き得るのだの意を含蓄するか。「龍門文庫本」は第三四句について、「天生一、自然此僧ハ耳ツフレ也。馬祖被レ喝セ、ツフレタ耳ニハマシタソ。其ノ竅モナイ耳ニテ、松風ヲ聞ハ、面白カルヘキ也」とし、「略註鈔」「夾山鈔」の解釈も同趣旨と思われる。

(20) 又此僧無听……太白可听松風云々注(19)に対して、別の解釈。この僧は馬祖の喝を聞かなかつた、只だ太白山に赴いて松にわたる風を聞いただけである、の意。

(21) 大休士寄スト云字ヲ置テ可也。偈の内容からして、この僧は大休歇した者（達道者）あるから、「大休士に寄せる」の文字を冠するのが相応しい、の意。

(22) 熱ハ怒而……又太タト云義モアリ『略註』には、熱滿に關する語注はない。「夾山鈔」に続翠の説として、「熱滿トハ者、欺ニ嫌ノ于人ヲ之謂ナリ也。熱ノ字ハ怒デ而出ス。氣ヲ則、内熱シテ而面ニ發ス。赤ノ噴拳熱喝ノ之熱モ、亦与レ之同シ也」と見える。「熱」の語には一義に程度の甚だしいの意があるとする。

0060 虎岩住東林

【京大本略註】

（60）虎岩住東林

或作孤峯。東林、晉遠法師古道場也。遠公嘗有識云、吾滅七百年後、寺變赤色時、我必再來、改此道場作禪林。常總禪師住此山時、寺變赤色、方知遠公後身、改律居作禪院。東林常總、嗣黃龍、老南。徑山虎岩淨伏嗣度虛舟、々嗣通無得、々嗣松源。

A 一塵不立話方ニ行ス

B 此日開堂作麼生

C 七尺烏藤靠ク壁上ニ

D 又成ニ沽酒醉シム淵明ヲ

風穴垂示、若立一塵、家國興盛、野老饗蹇、不立一塵、家國喪亡、野老安恬。謂於一塵不立処、更道開堂、作麼生是開堂一句。三四句、答云也。不行棒喝、而倒行逆施也得、恁麼不恁麼也得。蓋住東林、故用淵明故事也。虎岩当大元開運之首、道合元皇帝、有力補弼宗門、扶起叢林者也。山谷戲效禪月作遠公詩序云、遠法師居廬山下、持律精苦、過中不受蜜湯、而作詩換酒、飲陶彭沢、送客無貴賤、不過虎溪、而与陸道士行、過虎溪數步大笑而別。故禪月詩云、愛陶長官醉兀々、送陸道士行遲々、買酒過溪皆破戒、斯何人斯師如斯。或云、此頌始終、所謂實際理地、不受一塵、仏事門中、不捨一法之義。

〔欄外注〕

禪儀外文序曰、唐宋之間迄于汴京、入院開堂、兩也。南渡後、合為一焉。禪和子住持体裁、七尺烏藤倚壁而已。雖然、也須有接化度生垂手処也。

【校異】

*峯—岸

*遠—惠遠

*得—碍

*法師—ナシ

*受—立

*兀—元

【大義寫本】

虎岩住東林

A 一塵不立話方行

B 此日開堂作麼生

C 七尺烏藤靠壁上

D 又成沽酒醉^{ウツテ}三淵明

東林廬山也。晋惠遠法師古道場也。曾識云、七百年後、寺變赤色、時我必再來、改此道場、作禪林。常総禪師住此時變色、方知遠公後身。風穴垂示云、若立一塵、家國興盛、野老安貼、若不立一塵、家國喪亡、野老顰蹙、若是一塵不立、話方行更向甚処開堂。又禪和子住山時、体裁七尺烏藤倚壁而已。更無別事。雖然遠公邀陶淵明、沽酒和醉、和上、又応有此事。虎岩当太元開運之首、道合老皇帝、有力補弼禪宗、扶起叢林者也。

【傍注】

C 無事之義。

【欄外注】
或云、此頌、意、終始實際理地不受一塵之義。
住東林故、用淵明故事。

【略註抄】

虎岩住^{レス}東林

明極ノ師ゾ。伏虎將軍ト云テ甲冑ヲキテ、大將ヲセラレタゾ。松源¹⁶派也。日本ニ松源派ガ四支アルゾ。拱横川、岩運庵、開掩室、謙大歇也。東林ハ廬山ノ東林ナリ。初ハ遠法師ガ居タ処ゾ。後ニ七百年過テ禪宗ニ成テ、聰長老ノ住シ初メタゾ。

A 一塵不^レ立^セ話方^ニ行

一塵不^レ立^ハ、家國喪亡^{スト}云テ、仏祖ヲモ掃蕩シ、化門ヲモ破タ処ゾ。一塵立セヌガハヤ建立十成ゾ。

B 此^レ日開堂作麼生

上ミ如^レ件^ンナラハ、今日開堂シテ何ニシヤウゾホトニ、作麼生ト一撝也。三四ノ句ハ答テ云也。

C 七尺^ノ烏藤^{ヨセカ}靠^レ壁^{上ニ}

開堂ノ義式ニハ、法堂ヲ装テ主丈払子ヲ置クゾ。

D 又^ナ成^{カツ}沽^テ酒^ヲ醉^{シムルコトヲ}淵明^一

恁麼不恁麼トモニ得タ境界ゾ。測明ガ酒ヲ置テ、律ヲ破タヤウナコトヲモセイデハ、仏事門中不捨一法ヂヤホトニ、何ニカ苦イゾ。又七尺^一トハ、主丈モ入ヌホトニ、壁ニ倚セカケテライタトモ^見。主丈払子ヲモ取ズ、棒喝ヲモ行セズ、倒行逆^旅自由ヲ得タトモ見ベキナリ。又一塵不^レ立ガ、話方ニ行シヤウヂヤニ、今日開堂シテ、主丈ヲ壁ニ靠ケタハ、入ヌコトゾ。遠法師ガ酒ヲ置テ、測明ニ吞セタホトノコト、セマジイコトヲセラレタトモ見ルナリ。又此虎岩ハ、宋朝モ賞翫セラレタ人ヂヤガ、宋朝已ニ家國喪亡シタニ出世ハ無用ゾ。結句、今又入院スルホトニ、コヅイシヤウニ、寺ノ方デ酒ヲ買テ、且那モテナスヤウナコトヲセラル、ゾ、ト抑下ナリ。

註 開運^{トハ}開國^{ト云}心也。

【60】 注

(1) 或作孤峯。『孤峯』とするものは未詳。五山版『江湖風月集』には、『孤岩住東林』とする。但しA「方」を「正」に作る。

(2) 東林……古道場也。東林寺は江西省廬山にあり、晋代に慧遠により創建された。『仏祖歷代通載』卷七(大正蔵四九・五二五b)五二六b)、『仏祖統紀』卷二十六(大正蔵四九・二六〇c)二六三a)等。『略註』14「上宰公」注(3)(4) 参照。

(3) 遠公嘗有識云……作禪院。これと同文の出典は未詳。類似の内容が『仏祖歷代通載』卷十九「江州東林常総禪師」に、「元豐三年、詔革江州東林律居為禪。觀文殿學士王公詔出南昌、欲延宝覺心公、心拳総自代。総知胄道去十余里、檄諸郡期必得之。得於新淦殊山窮谷中、遂応命。其徒相謂曰、遠公嘗有記曰、吾滅七百年後、有肉身大士、革吾道場、今符其語矣」(大正蔵四九・六七四a)と見える。『禪林僧宝伝』卷二十四「東林照覺総禪師」(統蔵一三七・五三六a)もほぼ同文。

(4) 東林常総嗣黃龍。常総(一〇二五—一〇九一)は臨濟宗黃龍派、黃龍慧南の嗣。初め湧潭に住し、次いで東林寺に遷る。照覺禪師と賜号される。『五灯会元』卷十七に「江州東林興龍寺常総照覺禪師延平施氏子。久依黃龍、密授大法決旨、出住湧潭、次遷東林。皆符識記」(統蔵一三八・六五五a)とある。注(3) 参照。

(5) 徑山虎岩……松源。虎岩淨伏(生没年未詳)、虚舟普度の嗣、松源派。法嗣に明極楚俊がいる。『増集統伝灯録』卷五(統蔵

一四二・八四五 a、b。

(6) 風穴垂示……野老安怙〓なんらかの手立てをして国が盛んとなれば野老は眉をひそめ、何もせずに国が減んでしまおうと野老は安堵する、という風穴延沼の語。禅宗の機関説では前者を建立門、後者を掃討門という。『五灯会元』卷十一(統藏二三八・四〇八b)、『天聖広灯録』卷十五(統藏一三五・七三六b、但し「怙」を「貼」に作る)。「怙」の字義は、「静也。安也。服也」(『首書』注)。「碧巖録」第六十一本則は、この風穴の語を取り上げ次のように言う、「若立一塵、家國興盛。不立一塵、家國喪亡。雪竇拈拄杖云、還有同生同死底衲僧麼」(大正藏四八・一九三b)。ここで雪竇が拄杖を拈じて語を重ねたことをCは踏まえている。

(7) 謂於一塵……答云也〓一塵も立せぬところですでに真実の話は発現しているという掃討門の立処(A)において、さらに開堂の一句を追おうとするとはいかなることか(B)と問いを建て、CDはこれに対する答えであると、詩の構成を解説する。

(8) 不行棒喝……不恁麼也得〓一塵を立せずして、開堂の説法も拄杖を壁に掛け置くだけという掃討門のあり方に対するコメント。七尺烏藤は拄杖のこと。棒喝という禅の常套的な手段に及ばず、道理に逆らうも、肯定にも否定にも関わらぬ、自由自在な禅機のありようとして、『略註』は虎岩の東林寺開堂を称賛している。

(9) 蓋住東林……故事也〓虎岩が住する東林寺に、かつて慧遠(三三四～四一六)が白蓮社を結成していた頃、親交のあった陶淵明が来る

『江湖風月集略註』研究(五)(飯塚・佐藤・比留間・堀川)

と、慧遠は禁を破って酒を与えていた。この二人に陸修静を加えた三者の交遊は、虎溪三笑の故事として知られる(『仏祖統紀』三六、大正藏四九・三四二b)。「略註」14「上宰公」注(13)参照。

(10) 虎岩当大元……叢林者也〓宋朝から元朝に変わる時、虎岩は元帝の帰依を受け重用された。こうした虎岩の宋、元に対する態度について、『添足』は「或云、虎岩得宋朝之遇又合元太祖、故此頌有諷意、一塵不立、家國喪亡、何元朝開堂祝聖。然非好出世、然拄杖靠、有出世作用之機者、只住持仏法者。方便門中、聊隨時宜祝聖、非忘宋詔元、有意護持仏法而已」と言う。

(11) 山谷戲效……師如斯〓『黃山谷詩集』卷十七所収。Dに因んで挙げる。『略註』14「上宰公」注(15)参照。

(12) 或云……一法之義〓本詩の全体を解釈する一つの立場として、一切の接化方便に出ない掃討門の立場も、あえて禁を犯して酒を勧めるようなことも、すべては仏事門のうちに行われるもので、一つも捨てるべきものはない、という説。この解釈は『大義写本』欄外注、『略註抄』でも触れているが、『添足』は「此注難合頌」と批判する。

(13) 禅儀外文……合為一篇〓虎関師練撰『禅儀外文集』序文による。原文ではこの後に、「是我門之大儀也、以故疏榜出焉」と続く。この入院開堂について、景聡興勛撰『禅儀外文集鈔應斷』(天文八・一五三九年写)は、「唐宋ヨリ一段也。汴京ハ即汴梁路、南渡以前、所_レ都也。入院開堂ハ阿ツ也。大恵マテハ、入院ラシテ、別処_テ、開堂ラセラレタ也」と説明している。

(14) 禅和子……垂手処也。禅者が「烏藤椅壁」することも接化度生の方便門だと解する。『添足』に「烏藤靠壁者、有可接来学之機也」とある。

(15) 伏虎將軍ト……セララタゾ。虎岩が戦役に従事したことについて記す。『襟帯集』にもこれと同文が見える。

(16) 松源派ナリ……大歇也。松源派は臨済宗楊岐派の流れをくみ、松源崇岳を派祖とする。横川如珙(一二二一〜一二八九)、永嘉(浙江省)の人、靈巖寺、能仁寺、阿育王寺に住す。運庵普巖(一二五六〜一二二六)、四明(浙江省)の人、運庵、普照寺、光孝寺、万寿寺に住す。掩室善開(不詳)、鎮江(江蘇省)金山に住す。大歇仲謙(一二七四〜一二四四)、義烏(浙江省)の人、保寧寺、太平寺、資聖寺、阿育王寺等に住す。

(17) 恁麼不恁麼……見ベキナリ。拄杖を禅者が手にして開堂演法に臨むのが一般的であり方だが、これを手放したところに「一塵不立」と通ずるものを『略註抄』は見ている。注(8)に見た『略註』同様に、虎岩の掃討門的禅機のありようを称美する。『略註抄』に近い抄として、『襟帯集』に「一塵——智不到ノ処ナント云機ナソ。一塵不立家国喪亡ト云テ、言ハ説法モセン処テハ、ハヤ建立十成シ

テソ。不立処テ話カ行スル也。此日——此人機鋒一塵不立ノ処テ、話方行タラハ、サウアラウニハ、説法開堂シテハ何ノ用処。此日ワナニヲ説クソ。七尺——開堂ノ儀式ニハ先法堂ヲサカツテ、拄丈ヲ扨子ヲ置クゾ。一塵不立ノ処ニ話方行シタラハ開堂ノ儀式モナンノ用ニシテハ此ヤウニセマシイ事ヲセウニハ」と見える。また江西龍派は、「一塵不立」を高く称揚し、「続云、一塵不立処、正令当行、謂之妙明一句威音外。正是功与位共絶、偏与正共泯処也。於是按人則抜釘抜櫛」(『夾山鈔』)と述べている。

(18) 又一塵不立……見ルナリ。この説では、拄杖を壁に掛けたことさえも余計なことと見る。それは慧遠が涑明に酒を与えたと同じく、冗長な接化と見ている。

(19) 又此虎岩ハ……ト抑下ナリ。この説では、虎岩の宋元兩朝に対する態度の変節を踏まえて詩を解釈している。すなわち宋朝が滅び元になると、おもねるように元朝に親近してゆく虎岩の態度を、慧遠と涑明の故事を踏まえ、寺の方から旦那に追従するようすに譬え、虎岩の態度を批判的に押さえている。コヅイシヤウは小追従(時代別国語辞典・室町時代篇)。

0061 劍空

【京大本略註】

(61) 劍空 号

盤山宝積禪師云、譬如擲劍揮空、莫論及^{*}之不及、斯乃空輪無迹、劍刃無虧、若能如是、心々無知、全心即仏、全仏即人、々
仏無異、始為道矣。古徳語云、利劍斬虚空、万象鳴剥々。

A 巧鑄初^ニ非^ニ百煉成^ニ

B 地函天蓋^ニ古霜清^シ

C 七星夜々映^ニ虚碧^ニ

D 知為何人負^ニ不平^一

地函^一一雲門三句有函蓋乾坤句。古霜劍名也。七星者劍之飾也。漢高祖、斬白蛇劍、々々上有七星珠、九華玉、以為飾。

雜廁五色、瑠璃為匣。劍在室中、光彩猶照於外与^{*}梃劍時不殊。十二年一加磨瑩瑩、刃上常^{*}若霜雪。開匣拔鞘、輒有風
氣光彩射人。古語云、劍為不平離宝匣、葉因救病出金瓶。抄云、虚空即宝劍之躰也。箇劍為何人出匣乎。此言七星者、
劍上七星、又天上北斗七星、二俱兼用也。或云、亦劍名也。

〔欄外注〕

一火鑄成一槌打就底之劍也。頓機也。

尋常之劍、可百煉而成。此宝劍、不俟人力。何則地函^一。

〔出典〕

未詳。『大義写本』はC「映」を「耿」とする。『龍門文庫本』には「耿^ニ虚碧^ニ、耿或乍映^ニ」との指摘がある。

〔校異〕

*之^一与 *梃^一拔 *若^一如

〔大義写本〕

(61) 劍空

A 巧^ニ鑄^ル初^ニ非^ニ百煉^一成^ニ
号也。蓋取擲劍揮空之語。

B 地函^{カシ}天蓋^{カイ}古霜清^シ

C 七星夜々^{アキヲカナリ} 虚碧^ニ

D 知^カ為何人^ニ一負^ウ不平^ヲ

西京雜記云、漢高祖斬白蛇劍、々々有七星珠、九華玉、以為飾。雜則五色、瑠璃為匣。劍在室中、光彩猶照於外与挺劍時不殊。十二年一加磨瑩、刃上常若霜雪。開匣拔鞘、輒有風氣光彩射人。又劍可百煉成、空非百煉成、故云爾。地函天蓋空也。雲門有函蓋乾坤。七星在古劍上、又北斗七星在虚碧空上、兩共可用故也。劍為不平初出匣是也。雪豆頌提來勝得豐城劍、報尽人間兩不平。又古霜劍名也。

〔欄外注〕

古語、劍為不平出宝匣、藥因救病出金瓶。

〔略註鈔〕

(61) 劍空 号也。

A 巧鑄^{シユ}初^{ヨリ}非^ス百煉^{シテ}成^{スニ}

ヨイ劍ヲハ百煉シタ金デ鑄ル物ゾ。是ハ尋常百煉シタ

金ネデハ鑄ヌゾ。

B 地函天蓋古霜清^シ

其劍ハ地ヲ函トシ天ヲ蓋トシタゾ。古霜清トハ劍ヲ云也。

C 七星夜々^{カシ}映^{カス}虚碧^ニ

漢高祖斬白蛇劍ノカザリニ七星ヲシタホトニ、劍ニヨイソ。

D 知^カ為何人^ニ一負^ウ不平^ヲ

劍ハ不平ヲ平ウ用デヤガ、何タル不平ヲ負タ者ガアルゾ。底心ハ吾家ノ金剛王宝劍ハ尋常ノ百煉シ金デハ作ヌゾ。地函――天地ヲ函ト作シタゾ。七星――七星映虚碧タガ此劍光ゾ。知為何人――此劍ノアル上ヘハ誰レデモアレ背ク者ガアツテコソ劍空ノ二字ニ合テハ。巧鑄――成ハ劍也。地函――清ハ空也。七星ハ劍也。虚ハ空也。知為――劍也。

【61】注

- (1) 盤山宝積禪師……始為道矣。宝積は馬祖道一の嗣。幽州(河北)省 盤山に住した。『景德伝灯録』巻七に「幽州盤山宝積禪師。僧問、如何是道。師曰、出。僧曰、学人未領旨。師曰、去。師上堂示衆曰、心若無事万象不生。意絶玄機纖塵何立。道本無体、因道而立名。道本無名、因名而得号。若言即心即仏、今時未入玄微。若言非心非仏、猶是指蹤之極則。向上一路千聖不伝、学者旁形如猿捉影。夫大道無中復誰先後。長空絶際何用称量。空既如斯道復何説。夫心月孤円、光吞万象。光非照境界亦非存。光境俱亡、復是何物。禪德。譬如擲劍揮空。莫論及之不及。斯乃空輪無迹劍刃無虧。若能如是心心無知。全心即仏全仏即人。人仏無異始為道矣。」(大正蔵五一・二五三b)とある。心と仏と人が一体になった境地を、虚空に剣をふるつても剣がほころびないさまたとえる。
- (2) 古徳語云、利劍斬虚空、万象鳴剥々。鋭い剣で虚空を斬れば、あらゆるものが鳴る。『密庵録』に「応庵和尚忌日上堂。利劍斬虚空。万象鳴曝曝」(大正蔵四七・九六三c)とある。
- (3) 雲門三句有函蓋乾坤句。B句「地函天蓋」の典典を示したもの。『雲門三句』は徳山縁密が師の雲門文偃の接化の手段を三句にまとめたもの(徳山三句)ともいうで、有函蓋乾は師家と学人の問答がびたり適合すること。『人天眼目』巻二に「雲門宗」の「三句」として次のようにある。「師示衆云、函蓋乾坤、目機鉢両。不・万縁、作麼生承当。衆無对。自代云、一鏃破三関。後來徳山円明密禪

師、遂離其語為三句。曰函蓋乾坤句。截断衆流句。隨波逐浪句」(大正蔵四八・三一一a)

(4) 古霜剣名也。B句「古霜」を剣の名とする。こういう名の剣が過去にあつたというわけではなく、文脈からの注か。

(5) 七星者剣之飾也……光彩射人。C句「七星」を剣の飾りとし、漢の高祖が所持した剣に七星があつたことを引く。『祖庭事苑』巻三に「七星、剣飾也。西京雜記云、高祖斬白蛇剣、剣上有七星珠、九華玉以為飾。雜廁五色瑠璃為匣。剣在室中、光影猶照於外、与挺剣不殊。十二年一加磨瑩、刃上常若霜雪。開匣拔鞘、輒有風氣、光彩射人」(続蔵一一三・三三三c~d)とある。

(6) 古語云……金瓶。D句「不平」が「剣」と関係することを示す。剣は不平があるとき匣から出され、葉は病を救うときに瓶から出される。『楊岐録』巻一に「師拈起拄杖云……良久云。剣為不平離宝匣、葉因救病出金瓶。喝一喝卓一下。參」(大正蔵四七・六四〇c)とある。同様の語が『密庵録』『虚堂録』にも見える。

(7) 抄云虚空即宝剑之鉢也。虚空がこの宝剑の本体である。「抄」が何をさすのか未詳。

(8) 一火鑄成一槌打就底之剣也。A句で「百煉して成つたのではない」と言っているのを受けて、一回火に入れ、一回打つただけでなつたのだ、とする。

(9) 尋常之剣、可百煉而成……不仮人力。百煉して成つたのではない」についての別の解釈。この剣は人の力によらずにできた。だ

から地を箱に、天を蓋にするのだ、とする。

(10) 又劍可百煉成、空非百煉成、故云爾。A句について「劍は百煉して成るが、空は百煉しても成らないことを言っているだけだ」とする。

(11) 雪豆頌……両不平。『明覺錄』卷一に「上堂、因僧送拄杖上師。師拈起成頌云、清峻孤根別有靈、勢含山水自分明。提來勝得豐城劍、報尽人間兩不平」(大正藏四七・675c)とあるのをふまえる。

0062 悼太虛藏主

〔京大本略註〕

(62) 悼太虛藏主^一

太虛、道号也。或作西山太虛。

A 昔不曾生^セ今不^レ亡^セ

B 太虛無際露堂々

C 髑髏那畔^ニ重^テ相見^ス

D 立^ニ尽^{シテ}空山^ニ又夕陽

抄云、第一句、太虛辞世頌也。又云、諸法空相、不生不滅。更無^③辺際、本来面目露堂々。偈合髑髏^④是甚麼物。第四句、悼意也。利山慈溪禪師与慶藏主問答云、空山人絶處、立尽夕陽斜。故為藏主機縁用之也。拳頭^⑦殘照在、元是住居西。

〔欄外注〕

抄云、已是太虛藏主也。故虛空体即是藏主本来面目。今重相見、則空山夕陽皆太虛也。

唐高宗帝、遣内侍薛簡馳書、詔六祖禪師。々辞疾不起。簡遂問師、如何是大乘見解。師曰、明与無明其性無^②。々々之性即是仏性。々々者、処凡愚而不滅、在賢聖而不増、住煩惱而不乱、居禪定而不寂。不断不常不來不去、不住中間及其内外、不生不滅性相如々、常住不遷名之曰道。簡曰、師説不生不滅、何異外道。師曰、外道説不生不滅者、以滅止生、以生顯滅。我説不生不滅者、本自無生、今則無滅、所以不同外道。你欲会心要、但一切善惡都莫思量、自然得入清淨心体、湛然常寂妙用恒沙。簡蒙指教、豁然開悟、拜辞帰闕、表奏師語。

【出典】

不明。

【校異】

*太—大（三つとも）

*利—刑

【大義写本】

(62) 悼太虚蔵主

道号也。

A 昔不_レ曾_テ生_セ今_マ不_レ亡_ヒ

B 太虚無際露堂々

C 髑髏那畔重_テ相見

D 立_ニ尽_セ空山又夕陽

是諸法空相、不生不滅、更無辺際、面目露堂々、仮合髑髏是甚廢物。立尽空山斜、⁹⁹者_ハ相見底廢。

【欄外注】

利山慈溪禪師与慶上主問答云、空山人絶処、立尽夕陽斜。故上主之機縁用之。虚空体即是上主本来面目。今於虚空那畔重相見、立尽到夕陽也。

【傍注】

A 此句、蔵主之辞世之頌也。

【略註鈔】

(62) 悼太虚蔵主_ニ

太虚ハ道号歟。

A 昔不_レ曾_テ生_セ今_マ不_レ亡_ヒ

メツラシウモ無イ不生不滅ノ法門ゾ。太虚ノ辞世ノ頌

ヲ其儘一ノ句ニライタ歟。

B 太虚無際露堂々

此人ハ太虚蔵主デヤホトニ、太虚ノ無際ナコソ面目ヨ。イツ、モキツカトシテアルゾ。無際トハ、ヘダテナキ

義ナリ。

C 髑髏那畔重_テ相見

髑髏ノアル墓ワラデ、頌ヲ作ラレタホトニ、爰デ重テ相見シタゾ。何ンゾト云ヘバ、

D 立_ニ尽_セ空山又夕陽

空山モ太虚、夕陽モ太虚ゾ。相見デハ無イカ。慶蔵主ノ語ニ立_ニ尽_セ夕陽斜_{ナリ}ト云コトガアルホトニ、蔵主ノ

縁ニ引クナリ。拳^ハ頭^ヲ残照在^リ、元^ト是住居^ノ西、ト云ヲ引タモ、残照ノアルハ吾ガ住居ノ西シナリ、残照モ太虚ナリ、トキ相見ナリ。

【(62) 注】

(1) 抄云第一句太虚辞世頌也。太虚藏主については『訓解添足』に「宗派図、光仏照下、有客太虚、恐此人乎(首書)」とあるが、禅学典籍叢刊所収の『首書』には当該注は見えない。辞世偈も不明(なお、題注にわざわざ「道号」であることを言うのは、通常「○○藏主」という場合は法諱で呼ばれるので、ここはそうではないことに注意を促したものでろう)。この句の用例としては、『絶海和尚語録』の「景愛尼寺開基如大禅師百年忌拈香」に「来無所従去無跡、昔不曾生今不亡、時移物換百年後、正体堂堂不覆藏、更有摩醯頂門眼、一輪紅日上樽桑」(大正藏八〇・七四七c)とある。拈香の偈であり、二句あとの「正体……」もB句を踏まえた表現であることから、本偈からの引用と見られる。冒頭「抄云」は同じく『訓解添足』に「刊行四卷抄」と注する。『略註鈔』を指すか。『略註』の再注釈である『略註鈔』が「抄云」として『略註』に引用されることはあり得ないのだが、『訓解添足』は先後関係を認識していなかったのだろうか。

(2) 諸法空相不生不滅。『般若心経』(大正藏八・八四九c)ほかに見える常套句(『略註鈔』は「メツラシウモ無イ」と言っている)。あらゆる物事は「空」であるから、生じたり滅したりすることはない。A句の表現の根拠として引用したもの。

(3) 更無……露堂々。どこまでも果てしない空(太虚)が本来あるがままの姿である。『禅宗頌古聯珠通集』卷十二に「踏得故鄉田地穩、本来面目露堂堂」(続藏一一五・六八a)とある。これは、馬祖の弟

子槃山宝積禪師が、ある日門外で葬列に出会い、駕籠かきの歌う挽歌と残された子供の泣き声を聞いて大悟したという話についての仏灯珣の偈頌の一節。これを引くことによって、A・B両句は、太虚が死も生も超越して存在する様を述べている、と説明している。もちろん「空」太虚は悼偈の対象である太虚藏主の名に由来する。

(4) 仮合髑髏是甚麼物 四大(地水火風の四大元素)が仮に和合して成った人間の体は、死んで髑髏となってもそれがどうしたというのか。元に戻っただけであり、本質は変わらない。C句「髑髏」の説明。

(5) 第四句悼意也 ひとけの無い山で夕日を眺めることが、すなわちC句に言う「相見」であり、追悼の意を表している、という説明。

(6) 利山慈溪禪師……用之也 太虚が藏主の地位にあつたので、慶藏主の問答を引用した、という説明だが、この問答は出典不明。『夾山鈔』と寛永版本は「刑山」とする。

(7) 拳頭……住居西 、『碧巖録』三十四則・頌評唱に「法眼円成実性頌云、理極忘情謂、如何有喻齊、到頭霜夜月、任運落前溪、果熟兼猿重、山長似路迷、拳頭残照在、元是住居西」(大正藏四八・一七三b) (九十則・頌評唱にも) とある。法眼文益の偈を引用したもので、ありのままの姿、本来の姿といった譬喩であろう。

(8) 已是太虚藏主……皆太虚也 名前がもとも太虚(はなはだ虚なり)なのだから、空虚であることが本来の姿であり、髑髏となつた彼に再び会つても空虚であることは空山や夕陽と同様変わらない

い、の意。C・Dを実体化せず、譬喩として解釈している。

(9) 唐高宗帝……表奏師語 、『六祖壇經』宣詔第九(こ)こでは皇帝は中宗) 以下、諸書に見えるが、「禪門諸祖師偈頌」卷一に「唐高宗帝、遣内侍薛簡謁書、詔六祖禪師。師辞疾不赴。簡遂問師、如何是大乘見解。師曰、明与無明其性無二、無二之性即是仏性。仏性者、処凡愚而不滅、在賢聖而不増。住煩惱而不乱、居禪定而不寂。不斷不常不來不、不住中間及其内外。不生不滅性相如如、常住不遷名之曰道。簡曰、師說不生不滅、何異外道。師曰、外道說不生不滅者、以滅止生、以生顯滅。我說不生不滅者、本自無生、今則無滅。所以不同外道。你欲会心要、但一切善惡都莫思量、自然得入清浄心体、湛然常寂妙用恒沙。簡蒙指教、豁然開悟、拜辞帰闕、表奏師語。帝復詔」(統藏一一六・四六四c) とあるのが最も近い。慧能の言う「不生不滅」とは、もともと生がないから滅もない、の意であつて、外道が説くように、生と滅が相互作用するものではない、ということ。注(2) 部分の説明を補足した引用であらう。

(10) 者个相見底麼 、『この「相見」(太虚と会つた) とはいかなることか(答えて見よ)。講義聴聞者への拶語であらう。底と麼の間に「甚」などの疑問詞が脱落しているか。

(11) 髑髏ノ……シタジ 、『髑髏が埋まっている墓地(墓ワラ) 』墓原)でこの偈を詠んだので、ここでもう一度会つた。「那畔」を実体的に解釈したもの。したがってD句もその墓地の情景になる。

(12) 空山モ……相見ナリ 、『空山(人けのない山)も夕陽も空しいも

のである。慶藏主のことばに夕陽が出てくるので、同じ藏主という縁で用いている。「挙頭……」も残照と夕陽が同義であり、同様に空しいものである。つまりD句はそれら空しいものゝ太虚と対面すること、その名の通り太虚（藏主）と会っている、と詠むのだ、の意。「夾山鈔」では、太虚は今もう亡く、ただ山と夕陽のみは以前と変わらずある、というのが表面の意で、裏の意として、それこ

そが太虚の真面目であり、空虚な太虚藏主と作者はここで会っているのだ、と解する。龍門文庫本でも「立尽——ト現成シテ見セタソ」と、D句に太虚のありのままの姿が描かれているとする。なお、『襟帯集』には、「瑞溪（周鳳）曰、朝日ハソノマ、メクリ、夕日ハカナシイナント、ハ見マイソ」とあり、夕日に知人をつ失った寂しさを象徴させている、というような情緒的な解釈を戒めている。

0063 馬郎婦

【京大本『略註』】

（一二）四明末宗、本和尚

西禅末宗徳本、嗣断橋倫、住鼓山、宗一本作叟字。

（63）馬郎婦

観音^②化身也。詳見通論二十二。或云^③、普賢御庵也。普賢女詩云、不識金沙灘畔女、時呼被作馬郎妻、慈悲做出風流事、

花本無心蝶自迷。

A 蓮敷^{ヒラケテキ}「鹹^ニ飛^ス香

B 経義^{ハハソ}何^ニ如^シ情義^ニ長^キ

C 鎖^レ夢^レ閑^レ空^ニ天^ニ似^レ洗

D 一^ハ鉤^ノ月^ヲ掛^フ幾^ノ人^ノ腸^ヲ

通論云、唐元和十一年、馬郎婦、不知出處。方唐隆盛、仏教大行。而陝右俗習騎射、人性沈鷺^{シタウ}、樂於格闘、蔑聞三宝之名、不識為善儀、則婦怜其憨、乃之其所。人見少婦单子、風韻超然、姿貌都雅。幸其無侍衛無羈属、欲求為眷属。曰、我無父母、又鮮兄弟、亦欲有婦。然不好世財、但有聡明賢男子、能誦得我所持経、則吾願事^レ之。男子衆爭求観之。婦投以普門品曰、能一夕通之、則帰之。至明發誦徹者、二十余輩。婦曰、女子一身家世貞潔、豈以一人而配若等耶。可更別誦。因授以金

剛般若、所約如故。至且通者、猶十數。婦又授以法華經七軸、約三日通徹者、定配之。至期獨馬氏子得通。婦曰、君已過衆人。可白汝父母、具媒灼嫂禮。然後可以姻。蓋生人之大節、豈同猥巷不檢者乎。馬氏如約具禮迎之。方至而婦謂曰、適以應接、体中不佳、且別、俟少安、与君相見未晚也。馬氏子喜、頓之他房。客未散、而婦命終。已而壞爛、顧無如之何。遂下地葬之。未數日、有老僧紫伽黎、婆貌古野、仗錫來儀。自謂向女子之親、詣馬氏問其所由。馬氏引至葬所。隨觀者甚衆。僧以錫撥開、見其尸已化、唯金鎖子骨。僧就河浴之。挑於錫上謂衆曰、此聖者憫汝等障重纏愛、故垂方便化汝。宜思善因、免墮苦海。忽然飛空而去。衆見悲泣瞻拜。自是陝右奉仏者衆。由婦之化也。謂、馬郎婦誦誦蓮經、故云蓮開齒牙。然經義不如婦之情義長也。鎖夢閑空者、抄曰、馬郎婦為度衆生、假受分段生死之身、猶如夢如空花也。所謂幻化空身也。天似洗者、無一物也。一鉤月者、指馬郎婦也。或云、菩薩清涼月、照衆生心水也。一月印衆水也。仏光頌云、只有金沙灘上月、夜深還照馬郎衆。維摩經七曰、或現作姪女、引諸好色者、先以欲鉤牽、後令人仏智。国清簡堂機禪師頌、夾山境話云、東西南北無門戶、大地山河不覆藏、今夜碧天雲脚尽、一鉤月掛幾人腸。齟与斷字同、齒根肉也。

〔欄外注〕

經義一、謂菩薩賺殺馬郎教之誦經、大慈大悲、深重恩義、深出經義者乎。經義与情義、孰長耶也。

或抄云、恩愛執情、皆是虛妄、浮虛如雲、譬如欲閑鎖夢与空、竟不可得也。煩惱如夢如空、無有実義。至此、如太清絶点。所以道、天似洗、只余一鉤月而已。

抄云、鎖夢閑空、教中有此語也。世間妄想愛欲、如夢如空、不可得也。

三四句、或抄云、上四字系馬郎、下三字属菩薩。谷詩、白髮三徑草、馬瘦三山葉擁門之句法也。

四句、上三字属菩薩、下四字系馬郎等。掛字応上鉤字。句面者、一片月海生、幾家人上樓之語勢也。人々盼此婦、悵望如晴月生嶺同仰之也。

鉤字、維摩經、先以鉤欲牽、而後令人仏智之鉤也。不知度幾人耶。

〔傍注〕

D或云、一鉤月者、新月也。

【大義写本】

（一二）四明末宗本和尚

諱德本、住鼓山、法嗣斷橋。

（63）馬郎婦

觀音化身。或云、普賢女、詳見通論二十二。普賢女詩、不識金沙灘畔女、時呼被作馬郎妻、慈悲做出風流事、

花本無心蝶自迷。

A 蓮敷^ニ齧^テ齧^テ唾飛^ス香

B 經義何^ニ如^ニ情義長^ニ

C 鎖^レ夢^ヲ閑空天似^レ洗

D 一鉤月掛幾人腸

馬氏男凶暴、無些道心、他昔与觀音有緣。菩薩化成女。

馬郎婦甚喜聘要嫁娶。美女云、你念法華得旨誦、為你

妻。馬郎日夕念經、遂得旨誦。女一夕終死、放屍金沙

灘、化為菩薩去、骨節如黃金鎖、云々。以是蓮開齒牙、

唾霧飛蓮香。法華妙義長何如恩愛情長。不知恩情愛執

皆是妄想浮虛如雲。譬如閑鎖夢与空、不可得也。菩薩

清涼月、照幾人之腸矣。譬如閑鎖夢与空也。夢如何、

空如何閑、皆是不実謂也。鎖夢閑空、皆是煩惱之謂也。

一鉤者、使釣衆生出煩惱苦海中者也。維摩經第七云、

一鉤者、或現作姪女、引諸好色者、以欲鉤牽、后令

入仏智、云々。

【欄外注】

○齧、齒根肉也。齧曲齒、又作齧齧也。齧齧、容□也。齒神也。又情義□□人風流也。

馬郎婦、猶如夢空、豈閑鎖乎。馬郎婦、則普賢所化也。

諸方言觀音者、非也。又經中有此語、言如夢如空、無

更意也。

一鉤者、婦令人々心連也。又云、初月曲□也。比婦顏。

仏光頌云、「^{（只有金沙功）}灘頭月、夜^{（唯照馬郎功）}」家。

【傍注】

A「齧」語斤反、「齧」胡交反。

B 此句、言經義不如馬郎胸中情義長也。

C「天似洗」言無一物也。

【略註鈔】

（一二）四明末宗本和尚

無準派也。日本へ録ガ渡^タソ。

（63）馬郎婦

マタ馬郎ニ嫁シハセネトモ、ハヤ嫂礼ヲシタホトニ、

馬郎ノ婦ト云ナリ。

A 蓮敷^ニ齧^テ齧^テ唾飛^ス香^ヲ

齧齧、齧ハハグキ、齧ハカムトヨムナリ。初メハ、普

門品ヤ金剛經ヲ読セタレトモ、後ニ法華經ヲ読セタホ

トニ、法華ヲ本ニ作ルニ依テ、蓮敷ーート云ゾ。敷ハ、ヒラクト云心ゾ。法華ヲ読メハ、口カラ蓮ガ生スルゾ。唾飛^レ香トハ、口ニ蓮華ガアラバ、唾ガ香ク無フテハ。

B 経義何^ハ如^シ情義^ノ長^キ

仏ノ経ヲ説レタモ、衆生化度ノ為ナレトモ、馬郎婦ノ女身ヲ現シテ、陝右ノ者ヲ化導セラレタ情義ハ、経義ヨリモ深イゾ。

C 鎖夢^ト関^ト空^ト天似^ト洗^ト

馬郎婦ノ衆生化度ノ為ニ女身ヲ現シタハ、如^レ夢如^レ空ゾ。夢ヤ空ガ関鎖シテ置レヤウゾ。天似^レ洗^トハ、無^レ一物義也。幻化ノ空身ヂヤホトニ、元ト無^レ一物也。

D 一^ハ鉤^ハ月^ハ掛^ク幾^ク人^ノ腸^ヲ

菩薩清涼ノ月ニ、幾クノ人ガ腸ヲ掛ケタナリ。女身ヲ現シテ陝右ノ者ヲ化導シタハ、欲^ハ鉤ヲ以テ牽テ仏智ニ入^レシメタコトゾ。掛^レ腸^ヲハ、掛^レ腸^ヲカ、両点也。

註

沈鷺、々ハ之利切、猛鳥也。氣ガ強クテ闘ヲ好ムナリ。

【63】 注

(1) 西禅末宗徳本……宗一本作叟字。末宗徳本は断橋妙倫の法嗣、無準師範の法孫。『増集統伝灯録』卷五(統蔵一四二・四二六d)に断橋の法嗣として立伝されるが「聴蛙」一首(本書所収)を掲げるのみである。五山版は「未叟」に作る。また『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』に末宗本の頌として七首収載されている。

(2) 観音化身……通論二十二「馬郎婦」は『襟帯集』に「メロフ」と読みが付されている。「略註」は、馬郎婦の典拠として「隆興編年通論」卷二十二の記事を挙げる。注(4)参照。又、『龍門文庫本』は典拠として『歷朝釈氏資鑑』卷七(統蔵一三三・六九b)の記事を挙げる。『訓解添足』は、『太平広記』卷百一、「延州婦人」の項を類話としてあげる。日本においても馬郎婦(馬郎婦観音)は早くから受容されており、無住道曉(二二六・一三二)の『雑談集』卷九「仏法二世ノ益并ニ逆修ノ事」に「定て彼の方便に観音の事ををしへ給けるなるべし。馬郎婦と云て、古人みな此事頌にも作れり」とみえる。同様の観音示現説話に「魚籃観音」の話がある。【補説】参照

(3) 或云、普賢女也……無心蝶自迷。『仏祖統紀』卷五十三に「○馬郎婦、憲宗元和、普賢化身」(大正蔵四九・四六二b)と見える。大休宗休「見桃録」珠溪宗輝禪定尼三十三年忌香語(大永五年(一二二五)九月二十三日)に「関空鎖夢、普賢女約馬郎、破微塵出経卷、仮四大作禅床」(大正蔵八一・四四九b)とある。【普賢女詩】

については、「龍門文庫本」、「夾山鈔」等諸本が引用するが、典拠未詳。馬郎婦が文殊の化身であるという説に基づく一例としてあげたものか。金沙灘の辺に埋葬された女は本当は誰なのか、時人に馬郎の妻呼ばれはしたが、大いなる慈悲で風流の事をなしたが(一説によれば、多くの年少と浮き名を流しはしたが)、花は本から無心であり(女はいつも無邪気に咲き誇り)蜜を求めて飛び交う蝶が自分を見失っている(女を我が物にしようと思道を上っている)だけのことだ。

(4) 通論云唐元和……由婦之化也。『略註』は、馬郎婦の典拠を『陸興編年通論』卷二十二(統藏一三〇・三二〇c)とするが、引用文と現行本との間には小異が見られる。

(5) 謂馬郎婦誦……婦之情義長也。ABの句について、馬郎婦は『妙法蓮華經』を誦誦していたので、蓮の花が口中に開くと言うのである。『法華經』の教義による救済よりも、馬郎婦の情義による方が(陝右の地の教化に関して言えば)優っている。Aの句に関して、『夾山鈔』所引の江西竜派(統翠)の説によれば、「第一、之句面、(統翠)云、馬郎婦常誦法花^ヲ、法花者、蓮花^{ナリ}也。故云^ニ蓮敷^ク、蓮^ニ齒^ニ也。蓮開^ク齒^ヲ牙^ノ間^ニ、故^ニ唾^モ亦香^{キナリ}也」とする。Bの句は、經義(經典に説かれた仏の教)は馬郎婦の慈悲の情義の到底及ばないとする。注(14)【補説 参照】。

(6) 鎖夢閑空者……幻化空身也。C句について、或る抄に言う、馬郎婦は衆生済度の為に、仮初めに流転生死の肉身を現じたのであり、その身は夢や空華のように実体の無いものである。即ち「幻化空身」

に外ならないのだと。「分段生死」は、「變易生死」の対で、衆生が迷いの世界で受ける生死の意。人身は壽命・果報などに限りがあることから分段という。【補説 参照】

(7) 天似洗者無一物也。『天似洗』とは、天空には綺麗さっぱり何もない(一物無し)の意。私見によれば、転じて何一つ実体のあるもの(永遠常住なるもの)はないことを含意するか。第四句に掛かり、天空には雲一つ無く、ただ碧天に鉤裂きの月を残すばかり、と言う情景描写とイメージを重ねる。「龍門文庫本」は「天似^レ洗ハ、此婦カ、法花^ヲ三日ノ中ニ誦^ミハテトラハ、相約セント云テ、入^ニ般涅槃^ニヲ云也」とある。これによれば、「天似洗」は、馬郎婦が『法華經』を三日の内に誦誦し得たならば結婚しようと言って、涅槃に入った(亡くなった)ところを領出しているとする。【補説 参照】

(8) 一鉤月者指馬郎婦也。『一鉤月』は、馬郎婦を指す。「鉤」によって惹起される愛欲の釣り針で釣り上げる(善行方便の)意と、「月」によって喚起される菩薩の清浄なる本然の性の意とを兼ねるか。唐・澄観『華嚴經行願品疏鈔』卷一に見える「大經云、菩薩清涼月、遊於畢竟空、衆生心水浄、菩提影現中」(統藏七四〇六a)と言う有名な句に基づくと思われる。宋、長水子璿『起信論疏筆削記』卷十八も「故華嚴云、……」(大正藏四四・三九三c)として引用するが、現行の『華嚴經』にこのままの形では見出せない。しかし、『諸回向清規』等、禪宗系統の回向文として用いられている。菩薩の清らかな月は、衆生の心水を照らす。一つの月の光が多くの水面に映

じるようなものだ、の意。

- (10) 仏光頌云……照馬郎衆＝無學祖元『仏光録』『馬郎婦』三首(其一)に「錦麟提起鬢雲斜、一朵娉婷解語花、千載金沙灘上月、夜深還照馬郎家」(大正藏八〇・二二五a)とある。

- (11) 維摩經七曰……後令人仏智＝「鉤」の字の典拠について、『維摩詰所説經』卷二「八、仏道品」(大正藏一四・五五〇b)の句であるが、或いは『大藏一覽集』卷四等からの引用かもしれない。

- (12) 国清簡堂機禪師頌……一鉤月掛幾人腸＝『嘉泰普灯録』卷二八所収「国清簡堂機禪師四首」の二に「夾山境話」(統藏一三七二〇一c・d)として見える。『夾山鈔』は、やはり簡堂

の頌を典拠として引用し、第四句について、「句面ハ一片月生ス海ニ、幾家ノ人上レト云、樓ニ句ノ意ナリ也。句中ハ、阿ニ此ノ婦ヲ而人人悵望スル者ノ如シ雨余ニ晴月初テ上ル時ノ。四海ノ人同時ニ仰望スルナリ也」と注する。

- (13) 顰与斷字同齒根肉也＝『広韻』卷一に「斷(齒根肉也)。顰(上同)」と見える。「顰」「斷」共に齒茎の意。

- (14) 経義……執長耶也＝Bの句に関する注。菩薩(化身としての馬郎婦)はしたたかに馬郎をたぶらかして、彼をして經典(法華経等)を誦経せしめたのは、まさしく大いなる慈悲に由来する極めて重い恩義といえるが、それは経義(經典に説かれた仏の教え)より出たものだろうか。一体経義と情義と、何れが秀でているのだろうか、の意。【補説】参照。

- (15) 或抄云恩愛執情……只余一鉤月而已＝ある抄の説によれば、愛

執は、すべて偽りであり真実ではない、虚空の浮き雲のようにではなく実体の無いものだ、例えば夢と空とを閉じ込めようとしても、決して得ることができないのと同じである。煩惱は夢や空と同じであり、実体の無いものだ。こういう理解に達すれば、天空に片雲すら無き澄みわたった、清浄なる境地といえる。だから、「天似洗」は、天空に釣り針のような月一つという意になる、と解する。

- (16) 抄云鎖夢関空……不可得也＝用例としては、『環溪惟一録』卷一に「解制上堂。昨朝結制、鎖夢関空、今朝解制、眼開天曉。且道、結底是、解底是。孤鶯高飛越落霞、天一色如秋水」(統藏一二・五五a)とある。

- (17) 三四句或抄云……擁門之句法也＝「或抄」について、「上四字系馬郎、下三字属菩薩」の一文は、統翠の説として『夾山鈔』に見え、「杜老」詩「有_二此_一」句法」として注する。「白髮三徑草」は『山谷詩集注』卷四「謝公定和二范秋懷五首、邀予同作」詩(第五首)に「何為陳師道、白髮三徑草」と見える。「馬瘦三山葉擁門」は、同卷六「次韻宋懋宗僦居甘泉坊雪後書懷」詩に「家移四壁書侵坐、馬瘦三山葉擁門」と見える。

- (18) 四句上三字……晴月生嶺同仰之也＝『夾山鈔』は、やはり簡堂の頌を典拠として引用し、第四句について、「句面ハ一片月生ス海ニ、幾家ノ人上レト云、樓ニ句ノ意ナリ也。句中ハ、阿ニ此ノ婦ヲ而人人悵望スル者ノ如シ雨余ニ晴月初テ上ル時ノ。四海ノ人同時ニ仰望スルナリ也」と注する。

- (19) 鉤字維摩經……不知度幾人耶＝注(11)参照。

【補説】

馬郎婦ならびに馬郎婦観音については、日本においても早くから説話の中に取り込まれており、たとえば無住道暁の『難談集』には以下のように見える。

(上略) 文殊ノ有身ヲ如來ノ種トノ給ヘル、此ノ道理ナルベシ。淨名居士云、「菩薩ノ方便、ヲロカナル者ヲ、引導スル、種々ノ方便ヲ説給ニ、好色ノ者ニハ、女人ノ形ト成テ、欲ノ鈎ヲ以テ、引テ道ニ入ル」ト云ヘリ。

漢土ニ、仏法スベテ信ゼズ、僧ナドヲモ、惡ミソシル惡人、有ル所ニワカキ女人ノ優ナル、流浪人ト、ヲボエテ、ミエケル。人ノ心ヲカケ、カタラヒ聞ケルニ、「我レハ、タノムカタモナクシテ、ウカレタル身也。アハレミ、ヤシナフ人アラバ、タノムベシ。タバシ、富貴種姓、才覚兒形ヲ思ハヌ、利根ニシテ經ナド、読誦セン人ヲ、憑ベシ」ト云テ、「觀音品ヲ、一夜ニ誦スル人ヲ、憑ベシ」ト云ケレバ、「我タトヲボエケル、二十人ヲボエタリケリ。身一人シテイカニ二十人ヲ夫ニスベキ。金剛經ヲ、一夜ニヲボエム人ヲ、憑ムベシ」ト云ケルニ、馬郎ト云ケル者、三日ニヲボエタリケリ。「君大利根聰敏ノ人ニテヲハシケリ。タノミタテマツルベシ」ト云テ、日ドリナンドシテ、旧里ヘ皈テ、約束ノ日來レリ。悦思フホドニ、「身ニワヅラヒアリ。イタハリテ、相ヒ見セント云ケレバ、便宜ノ所ニテ、葉ナド用ケレドモ、ヤガテ大事ニ成テ、息タエニケリ。モシヤト思程ニ、勝張シ臭爛シケレバ、トカク云

ニヲヨバズシテ、葬シテ埋テケリ。其ノ後チ日數ヘテ、紫ノ僧伽梨ノ袈裟キテ、錫杖ツキタル僧來テ、「カ、ル女人ヤ、ミエシ」ト問フ。コトノ子細カタリケレバ、カノ墓所ヘ行テ、錫杖ノ柄ニテ、ホリヲコシテ見レバ、骨ハ金ノ鑲也。錫杖ノエニカケテ、河ニテ洗テ説法シケル。人多クアツマリテ、聴聞シケルニ、コレハ觀音菩薩ノ、汝ガ生死ノ無常モ、因果ノコトハリシラズ、ヲロカニシテ、仏法ノタエナル道モ、シラザル事ヲ、アハレミテ、方便シテ、ヲハシマシタルヨシ、大方心モヲヨバズ、目出説法シ給ケレバ、諸人隨喜渴仰シ、菩提心ヲヲコシケル。サテ空ヘ飛テ去リ給ヒケリ

第二句に關して、『夾山鈔』は、統翠(江西竜派)の説を引用して、「第二句ハ、經義トハ、菩薩賺ニ殺シテ馬郎ニ教レ之ヲ誦經、大慈大悲ノ深重ノ恩義、深キ於彼馬郎ノ思ニ此ノ艶色ノ之謂アリ也」と注する。ここでは、菩薩(馬郎婦)が馬郎を誑かして誦經させた(仏法に目を向かせた)ことの甚深なる恩義の方が、馬郎が馬郎婦の艶色に寄せた思いよりも深いという意であるとする。一方、『襟帶集』は「仏ノ出世スルハ、法花經ヲ可レ説タメ也。經ノ慈悲ノ深イ事ハアルマシケレトモ、馬郎ヲ化度セウトキ、現レ女身アルホトニ、情義ノ慈悲ハ猶長イソ」と注釈しており、『龍門文庫本』も「經義一、イカナ深キ經義モ、此ノ菩薩ノ女身ヲ現シテ化導セラレタル慈悲情義深ニハ不及也」とする。馬郎婦の行儀(年少の美女に化身して男を籠絡して仏門に導いたこと)は善行方便(慈悲の情義)であり、いかなる經典の教えよりも優つているとする。

第三句に關して、『夾山鈔』所引の江西の説によれば、「第三ノ句ハ、

続云、鎖^レ夢^ヲ関^{スト}ハ空^ハ者、欲^{シテ}関^ニ鎖^ニト而^レ留^{トモ}之^ヲ、決^{シテ}而^レ不^ルノ可^レ得^{ナリ}之^ヲ。此^ノ馬郎欲^{スル}与^レ彼^ノ婦結^ニ借^テ老同穴^ノ之約^一者、譬^ハ如^ニ鎖^シ夢^ヲ関^{スカ}空^ヲ也。果^{シテ}不^レ及^初飲^ノ夕^ニ而^レ俄^ニ亡^ス矣。於^テ空^ニ徒^ニ本^レ無^レ実^ニ体、何^ノ得^ヤ関^{スコトヲ}哉。夢^モ醒^{ルトキハ}則^チ非^{ナリ}也。何^ノ得^ヤ鎖^{スコトヲ}哉」とある。即ち「鎖夢関空」とは、何物かを永遠に留めようとしても決して叶わないことの譬喩である。ここでは馬郎が彼の女と永き契りを交わそうと思つたのはまさしくこの譬喩の通りである。案の定、初夜にも到らないうちに、女は急に亡くなつてしまつた。本来空であるのだから、実体のある物など何一つ無い、どうしてそれを手中に留めることができようか、夢は醒めれば存在はしない、どうしてそれを閉じ込めておけようか、できない、と敷衍している。「龍門文庫本」も「鎖夢関空ノ字ハ、続伝灯録ニモアルソ。夢ハナニカ鎖レウソ。空ハナニカトサシツ

0064 過錢塘江

【京大本略註】

(64) 過^{シテ}錢塘江^ヲ

吳越^①兩^②國之間、有^③錢塘、杭州臨安府也。亦云、浙江。伍子胥魂化為海神。每年八月十五六七日間、怒激洪浪、鼓壞吳地。吳越王錢氏、築捍海塘、潮水衝擊、命強弩數萬、射潮頭、塘遂成、故名錢塘。又東漢書、始郡議曹華信義立防海塘。募^④致土石一斛、与^⑤錢一千。旬日之間、來者雲^⑥集。塘未成、而謠云、不復取。遂弃土石而去。塘以之成。因名錢塘也。

A 一橈^⑦煙水分^ニ吳越^⑧

B 兩岸^⑨青山無^シ古今^⑩

C 潮撼^⑪海門^⑫帆到岸^⑬

メラレウソ。言ハ四大和合ノ身ハ、如クナル夢者ヲ、迷倒ノ衆生ノ方カラハ、関鎖シテヲカウスヤウニ思ハ、ヲカシイコトソ。馬郎カ、此ノ婦ハ、イツマテモアラント思ハ、夢ヲ鎖シ空ヲトサ、ントスルト同シ」とあり、『襟帶集』も同様の解釈を施す。

第三句に關連して、『夾山鈔』は「天似^{タクトハ}洗^ニ者、依^テ旧^{キニ}菩薩清淨本然^ノ性、如^シ洗^ス一^ニ亘^ノ青天^ノ。為^レ度^シ馬郎^ヲ、且^ク現^ス姪女^ノ貌^ヲ、特地^ニ令^ニ人^ヲ起^ニ愛着^ノ心^ヲ、然^{シテ}後教^{ルナリ}入^レ仏道^ニ也。蓋^シ造句^ノ法奇^{ナリ}也」と注する。「天似洗」の語は、元より菩薩清淨本然の性は、どこまでも晴れ渡つた青空を洗出したようなものであり、愛欲などの煩惱は一つ無い。菩薩の化身である馬郎婦は、馬郎を救済する為に、仮初めに姪女の姿を現じ、わざわざ人々に愛着の心を起こさせた上で、仏道へと誘つたのである。ここは句作りの妙味である、と言う。

D 洪波ノ險ハ不^レ似^二人心^一

鏡清語云、移水知水脈、拳棹分波瀾。頌意謂、洪波雖險、棹即猶知其心、世波之險、其奈之何、豈有指乎。

〔欄外注〕

郡議曹華信、以華為氏。

〔傍注〕

A 「一橈」一心、「分吳越」凡聖

B 「無古今」凡聖無隔。

C 「帆到岸」穩坐シテ看。

D 未悟底ノ事モ起自這心。

〔校異〕

*也ーナシ

〔典拠〕

未詳。

〔大義寫本〕

(64) 過錢塘

杭州臨安府浙江是也。

A 一橈煙水分吳越

B 兩岸青山無古今

C 潮撼^二海門^一帆到^レ岸

D 洪波ノ險ハ不^レ似^二人心^一

吳越^⑦、江東、越地也。江西、吳地也。到江吳地尽、隔

岸越山多。伍子胥魂化為海神。每年八月十五日、六七

日間、怒激洪浪、鼓壞堤塘。吳越錢主^{王力}、築捍海塘、潮

水衝擊、命強弩数万、射潮頭、成此塘固、故云錢塘。

又說、群議曹花信義、立此塘以防海水。遂募有能開致

土石一解、与錢一千。旬日之間、來者雲集。塘未成、而譌不復取。遂弃土石而去。塘以之成也。故名錢塘。見東漢書。頌意者、洪波雖險、不如人險。

【略註鈔】

(64) 過_二錢塘江_一

乘_レ舟_ニテ透ラル、ナリゾ。錢塘ハ、東ハ吳、西ハ越ノ間ニアルゾ。

A 一橈_ノ煙水分_レ吳越_ヲ

一水ヲ隔テ、一方ハ吳、一方ハ越也。

B 兩岸青山無_レ古今

吳越ノ青山ハ、古今同シ物ゾ。道理ヲ云バ、兩岸青山分吳越、一橈煙水無_レ古今ト、兩岸ノ吳越ノ山ハカワレトモ、煙水ハ古今同シト云心ゾ。アレトモ、一橈煙水分_レ吳越無_レ古今、兩岸青山無_レ古今分_レ吳越ト、影略互見シテ見ベシ

C 潮撼_レ海門帆到_レ岸_ニ

錢塘江ハ、浪ノ惡イ処ゾ。就_レ中八月十五六七日ハ、伍子胥ガ來ルトテ、一段浪ガ惡イゾ。此ヤウナ浪ノ惡イ処ヲモ、船筏師ハ、船ヲ乗テ過ルゾ。

D 洪波ノ險不_レ似_レ人心_{ニハ}

洪波ノ險ナト云モ、人心ニハ如_シヌゾ。底心ハ、煙水青

山ニ、古今吳越ノ隔テハ無ゾ。アルニ、隔テ見ルハ、人心ホト險ナ物ハ無ゾ。洪波ヨリモ險ナゾ。ホトニ、其險イ人心ヲ脱シテ、無我無人ノ境界ニナラデハ。又一二ハ、其俣ノ現成ゾ。潮撼——岸、衆生ノ世波高シトイヘトモ、帆到_レ岸トハ、濟度ノ船ヲ浮ヘテ、尽ク彼岸ニ至ラシムルゾ。此トキハ、人心トハ、諸仏諸祖ノ大悲心ヲ指_シテ云也。

【64】注

（1）吳越兩國之間……亦云浙江。『方輿勝覽』卷一「臨安府」に「錢塘（九域志、錢塘初為潮水所損、州人華信以私錢作塘捍潮、因號一）とあり、同卷一に、「浙江（在錢塘。莊子云、浙河即浙江、取其曲折以為名）」とある。

（2）伍子胥魂化為海神。注（1）所引の『方輿勝覽』卷一「浙江」の割注に「○吳王、既賜子胥死、乃取其屍、盛以鴟夷之革、浮之江中。子胥因流揚波、依潮來往、蕩激隄岸、勢不可禦。或有見其乘白馬素車在潮頭者、因為之立廟。每歲仲秋、既望潮水極大、杭人以旗鼓遊之。弄潮之戲、蓋始乎此」と見える。同じ記事が『古今事文類聚』前集卷十五にも見える。

（3）吳越王錢氏……故名錢塘。『錢塘』の地名の由来に関する第一説。吳王錢氏が潮頭を数万の弓で射て、激波洪浪を治めたことに由来する。『韻府群玉』卷五「射潮」（錢王築捍海塘、潮水衝擊、命強弩数万一頭、遂成堤岸）」とある。

（4）又東漢書……因名錢塘也。『錢塘』の地名の由来に関する第二の説。郡議曹華信が謀議して、土石一斛に対して錢一千を与えるとして、集まった土石で海塘を成し遂げたことに由来する。『祖庭事苑』卷五「錢塘」の項に「昔郡議曹華信義、立此塘以防海水。遂開募、有能致土石一斛、与錢一千。旬日之間、來者雲集。塘未成而謫不復取。遂弃土石而去。塘以之成也。見東漢書」（續藏一・三・六六c）とある。京大本は、省略が成されており、文意がやや取りにく

い。この引用に関しては、『大義寫本』の方が正確である。

（5）鏡清語云……拳棹分波瀾。鏡清の語句としては、典拠未詳。『祖庭事苑』卷六に「一漚（水平善導初參洛浦、問、一漚未發已前、如何弁其水脈。浦云、移舟諳水勢、拳棹別波瀾。導不愜意、乃參龍盤語同前問。盤云、移舟不別水、拳棹即迷源。洛浦、本作樂普）」（續藏一・三・九二a）とあるのが参考になる。

（6）頌意謂……豈有指乎。頌の意は、錢塘江の大波がいくら危険だと言っても、棹（を操る船頭）は、その水脈を知っているが（渡る術を持つているが）、世間の波と言ったら險呑もいいところで、こいつはどうしようもない、いったい何の指標があるというのか（練達の士に教えてもらいたい物だ）。

（7）吳越江東……吳地也。第一句の注、吳と越の国は、錢塘江の東と西に分かれている。『龍門文庫本』も、「一橈一、江東ハ越地也。江西ハ、吳地也。故分吳越ト云也」と注する。

（8）到江吳地尽隔岸越山多。宋代禪者の語録において着語としてしばしば用いられる語。例えば『法演語録』卷一に「上堂云、永嘉道、取不得捨不得、不可得中只麼得。祖師道、不是心不是物不是仏。大眾且道、是箇什麼。乃云、到江吳地尽、隔岸越山多」（大正藏四七・六五四b）と見える。

0065 送入帰蜀

【京大本略註】

(65) 送^ル人^ノ帰^ル蜀^ニ

A 捱^イ得^ニ身^{シテ}形^ハ似^レ鶴^ノ癯^{タルニ}

B 精金百煉出^ツ紅^ニ炉^一

C 巴山夜雨青灯^ノ下^ト

D 仏法南方一点無^シ

抄云、捱^①与崖同、厮崖意也。李翱賛葉山云、鍊得身形似鶴形云々。李商隱夜雨詩、君問歸期未有期、巴山夜雨漲秋池、何当共剪西窓燭、却話巴山夜雨時。言、夜雨青灯下、話尽巴山情、此外別無一点仏法也。蜀西南也。巴山在蜀。或云、此時大元破宋、江南大乱、故恁麼道。偃溪送帰蜀僧頌云、脱得南方驢馬群云々。私曰、無字非有無之無、々は仏法哉。此義不好。

【欄外注】

翱詩曰、鍊得身形——千株松下函函經、我来問道無余説、雲在青天水在瓶。
⑧ 這僧飽參也。精金——紅炉者、作家炉鞴煅過也。
⑨ 抄云、南方者、南詢之義。

【傍注】

CD 此夜臨別青灯下ニテ、蜀ノ事ヲ語尽ス、此別南方へ帰テモ、別ニ仏法ハアルマイソ。

【校異】

* 捱——捱

* 此義不好——ナシ

【大義写本】

送人歸蜀

捱与崖同、^{（讀脱カ）}厮意也。李翱尚書問葉山、如何道、山以手指天、復指瓶云、会麼。李云、不会。山云、雲在青天水在瓶。

A 捱得身形似鶴癯^{ヤセタルニ}

B 精金百煉^{シテ}出^ニ紅炉^一

C 巴山^ノ夜雨青灯^ノ下

D 仏法南方^ニ一点無^シ

李翱餐葉山、鍊得身形似鶴形、千株松下両函經、我来問道無余説、雲在青天水在瓶、云々也。此僧徧參諸方炉韠故、云精金出紅炉。巴山夜雨青灯下、可有仏法南方今無仏法。時、当太元破宋、江南大乱、以是恁麼道也。巴山是蜀也。

【欄外注】

李商隱夜雨詩云、君問歸期未有期、巴山夜雨漲秋池、何当共剪西窓燭、却語巴山夜雨時。此時、太元破宋、江南大乱、故恁麼道、仏法南方無云々。又善財童子南詢之謂也。

【略註抄】

送^ル人^ノ歸^ラ蜀^ニ

A 捱^ア得^ニ身^{シテ}形^ヲ似^ク鶴^ノ癯^{タルニ}

捱得ハ、キハメウルトモ、又コラヘウルトモ云ゾ。又セメツムル義トモ云ゾ。身形ガ瘦セツマリテ、鶴ノ瘦セタニ似タゾ。

B 精金百煉^{シテ}出^ニ紅炉^一

諸方ノ知識ニ徧參シタハ、精金ノ百煉セラレテ、炉韠ヲ出タ如クゾ。

C 巴山^ノ夜雨青灯^ノ下

蜀ヘ歸テ、巴山ノ辺ニ灯幽カニ攪キ立テ居ラレウズ、參學事^ヲ了ツタ底ゾ。

D 仏法南方^ニ一点無^シ

ソコデハ南方ノ仏法ノ沙汰ハ、一点モアルマジキナリ。見事ノ境界ゾ。末宗ノ居処ハ、南方ヨリヂヤホトニ、此僧此間居タ処ヲ、南方ト指スナリ。^{（13）}又蜀ハ西南ヂヤホトニ、南方トハ蜀ヲ云也。蜀ニ歸テ後ハ、仏法一点モアルマジキトナリ。アレトモ初ノ説可也。^{（14）}偃溪ノ送^レ歸^ス蜀^ニ頌、脱^ニ得^ス南方^ヲ驢馬群^トアルモ、蜀ヲ南方デ無イト云証拠ニ引クナリ。^{（15）}大休ナトモ蜀ヲ南方ト見タハ惡イトヲシナルナリ。又ソチガ今巴山——ニ去ルホトニ、南方ニハ仏法一点モ無キトナリ。

【65】 注

- (1) 抄云……廝崖意也。ここでは「捥」の字義を、あいきわむる(廝崖)意とする。『夾山鈔』も「古抄云」として同文を引くが出典は未詳。『襟帶集』も「捥得ハ、キワメウスル」と同意に取る。なお本集(32)「送人省母」にも「捥得」の語が見え、ここでは京大本は「捥ハ者、撝也、極也。抄曰、究得^ル義也」と注している。(32)注(4)(5)参照。
- (2) 李翱賛葉山云……似鶴形云々。『景德伝灯録』巻十四に、朗州刺史李翱(李翱)と葉山の問答が次のようにある。「問曰、如何是道。師以手指上下曰、会麼。曰、不会。師曰、雲在天水在瓶。乃欣懷作札而述一偈曰、鍊得身形似鶴形、千株松下面函經、我來問道無餘說、雲在青天水在瓶」(大正藏五一・三二二b)と見える。略註は、ここに見える鍊得(修鍊得道)の意をAの「捥得」に対応させている。『大義写本』の題注もこの立場で注したもの。李翱を感服させた葉山の、苦修練行を成し遂げた瘦身鶴の如き姿形と、その洒脱な答問を、主題の僧のありように対比させて理解している。
- (3) 李商隱夜雨詩……仏法也。『却話巴山夜雨時』までが引用の詩、「三体詩」にあり。Cの典拠を示す。略註は、ここに言う巴山夜雨の情を語り尽くすところそのままが仏法であり、それ以外にはないとする。
- (4) 蜀西南也巴山在蜀。僧の帰り行く蜀と巴山を同所に見るところから、たんに地理的な一致のみでなく、Cで言うところの巴山がすなわち洒脱な場所であると同様に、僧の行先である蜀もまた、十二

分に修行し尽くした禅僧にふさわしい場所であることを言う。

- (5) 或云……故恁麼道。Dの註として挙げる。戦火により荒廃した江南に、仏法などないとする意。『夾山抄』もDの「句面」をこれと同意に取る。

- (6) 偃溪送歸蜀僧……驢馬群云々。『偃溪録』巻下に、「送僧歸蜀。脱得南方驢馬群、相逢無法可呈君、看儂百衲袈裟上、半是吳雲半楚雲」(中統藏二二・二九九b)とある。「南方」を蔑視した言い方を挙げ、南方の仏法の程度は低いことを言う。注(14)参照。

- (7) 私曰……此義不好。Dの「無」字の意を、有無の無の意味ではなく、「無」こそが仏法であるという解釈を挙げ、それを批判する。これについて『夾山鈔』は、南方の仏法を六祖の宗旨「本来無一物」と捉え、これをもつてDの解釈に充てている。「南方、仏法ハ者、猶^レ言^ニ六祖ノ宗旨ト也。蜀ハ西南ナリ也。故^ニ今言^フ南方ト乎。南方ノ仏法、人人自証自悟^{スル}而已^ハ、伝^ヘ受^ル底ノ之法者、一点^モ亦無^キ之謂^{ナリ}也。六祖門下ノ仏法ハ者、元来無一物ノ故^{ナリ}也。ただしこの箇所について「訓解添足」は、次のよう指摘する。「私曰無字至哉。此ノ十四字、東陽ノ之本^ニハ、註^ニ書^{シテ}之ヲ、傍^ラニ書^{シテ}此ノ義不好^ト以^テ朱^ヲ消却^ス。由^レ是^ニ觀^レ之ハ、刊行ノ時加^フル之者、元来誤^リ矣。依^テ之^ニ或^ハ曰^マ、此ノ無ハ趙州ノ無字意、或曰、六祖ノ本来無一物之無^ノ字意也等^ト、皆非也」。

- (8) 這僧……炉鑪煨過也。宗師家のもで十二分に修練を積んだ僧を、精金に喩えて言う。『襟帶集』には「諸方ノ善知識ニ□參シテ

辛苦シタナリ。精金ノ百煉セラレテ、炉轆ヲ出ル様ナソ」とあり、『夾山鈔』の頭注には「二ノ句ハ、此ノ事了畢シテ今蜀へ帰ラル、ハ、百鍊^{シテ}精金如^{ツルカ}レ出^ル」紅炉^マ言ハ我ガ炉轆ニテ随分ネリキタウテ、此ノ事ヲ會得セシメタト也」とある。

（9）抄云……南詢之義…南詢とは、『華嚴經』入法界品に説く善財童子の南行求法のこと。大義写本の欄外注もこのことを示す。

（10）此夜臨別……アルマイソ…「別れに臨む」とは、実際にその会下を辞して蜀に帰ろうとする僧と末宗との別離の場面のこと。あなたの帰行く蜀には、ここで得た以上の仏法はないぞ、という心情と解している。

（11）捱得ハ……トモ云ゾ…略註は捱得の意味を「きわめうる」と解していたが、『略註抄』はこれに「こらえうる」「せめつむる」を加え、三通りの意味に解している。『諸録俗語解』が『禪関策進』の「与他厮捱」の語について「他は話頭を指す。捱は（拒也）と註して（おしこばる）なり。（病をおしこらえる）を（捱病）と云う。『江湖集』『虚堂録』に（捱得して云々）とあるも此の義なり」と注しているが、これは第二「こらえうる」の意味に通ずる。

（12）ソコデハ……ト指スナリ…僧の修行していた末宗会下を南方と

捉え、ここを去って蜀へ帰りゆくあなたの行く先には、ここ南方のような仏法は少しもないであろうと解釈する。

（13）又蜀ハ西南……初ノ説可也…（12）とは逆に、僧の目指す蜀を南方と捉え、そこには仏法など少しもあるまい、と解する例を挙げ、「初ノ説」つまり（12）の解釈を可としている。

（14）偃溪ノ……証拠ニ引ナリ…『偃溪録』の語（出典は前注（6）参照）は南方の仏法を程度の低いものと見ているものであり、それゆえ蜀は南方ではないと言う例証という。

（15）大休ナトモ……ヲシナルナリ…大休は大休宗休（一四六八）一五四九、妙心寺住）か。出典は未詳。『略註抄』が大休の語を用する例は、本集51「贈裁縫」にも見える。

（16）又ソチガ今……無キトナリ…あなたがここから去ってしまえば、ここ南方にはまったく仏法が無くなってしまうであろう、と去り行く僧を高く称揚する言葉。『啓蒙抄』にも、Dに注して「此間南方ニハ、仏法ハ一点モ残ラス無クナルニテ有郎ス。サテ仏法ヲ押丸メテ、蜀へ取テ帰ラル、惜シヒコトカナ、偃溪ノ送僧帰蜀頌ニ、脱得南方驢馬群ト云モ、南方ハ此方ナリ」と見える。

0066 聴蛙

【京大本略註】

（66）聴^ツ蛙^ヲ

A 頭戴青苔^{ニテ}咄々^ヲ鳴^ク

B 千山虛寂^{ニシテ}月初明^{ナリ}

C 一機頓^{ニシテ}發^ス空^ニ諸有^ヲ

D 太雅松風^{ニモ}無^{ニシ}此聲^ヲ

① 月林觀禪師、見蛙頭戴青苔跳起而鳴、悟道。常云、蛙戴苔。咄々^②者、蛙鳴聲也。張侍郎九成、初參宝印楚明禪師。明拳柏樹子話、令時々提撕。一夕如廁、以柏樹子話究之、聞蛙鳴枳然契入。有偈云、春天月下一声蛙、撞破乾坤共一家、正与廢時誰會得、嶺頭脚痛有玄沙。古德云、若從文殊門入者、墻壁瓦礫、為汝發機。若從觀音門入者、蝦蟆蚯蚓、為汝發機云々。^{*}大雅者古曲也。或云、^{*}大雅与松風、共不及蛙声鼓吹也。或云、松風即^{*}大雅、々々之松風也。古語云、^{*}大雅作而淫哇沈声、貌絃鼓而衆音絕響。

〔欄外注〕

⑨ 一安国球禪師示衆云、若從文殊門入者云々、一切草木瓦礫云々。若從觀音門——、一切音響蝦蟆——
⑩ 空諸有者、龐居士伝、州牧于頔相公問疾次。居士謂曰、但願空^ニ諸有^ヲ。慎勿実諸所無。好住世間皆如影響。言訖枕公膝而化。伝灯八。

〔出典〕

『増集続伝灯録』卷五、末宗の章に「聴蛙偈曰」として載せる（続蔵一四二・四二六d）。

〔校異〕

*大—太

〔大義写本〕

(66) 聴蛙^ヲ

々者蝦蟆也。

A 頭戴青苔咄々鳴

B 千山虚寂月初明

C 一機頓発空諸有

D 太雅^カ松風無此声

咄々、鳴声也。一機空諸有、古語云、從觀音門入者、

蝦蟇蚯蚓、為汝發機。故旋觀音声空尽諸有、此真妙音也。

縱是大雅古曲松風清、不及者也。

〔欄外注〕

□林觀禪師見蛙頭戴青苔跳起而鳴悟道。常云。蛙戴苔

咄々。

張九成、初參宝楚明禪師。拳柏樹子話、令時々提撕。

一夕如廁、以柏樹子話究之、聞蛙鳴寂然契入。有偈曰、

春天月下一声蛙、撞破乾坤共一家、正与麼時難^{難カ}會得、

嶺頭脚痛有玄沙。

古語、大雅作而淫哇沈声、猗絃鼓而衆音絶響。

〔傍注〕

此句時節子也。

【略註鈔】

(66) 聴^レ蛙^ヲ

A 頭^ニ戴^テ青苔^ヲ咄々鳴^ク

青苔ヲ戴^テ鳴^クタゾ。咄々ハ鳴^ク声^ゾ。

B 千山虚寂^{ニシテ}月初明^{ナリ}

昼モ鳴^ケトモ、サワガシイホトニ、覺ヘヌゾ。サテ夜ハ一段閑テ、月モ明ニ、千山モ閑ナ時分、カシマシキ物ゾ。

C 一機頓^ニ発^{シテ}空^ニ諸有

張九成ガ蛙ヲ聞テ契入シタゾ。蛙ヲ聞テ一機ノ発スル

処^デ所有^ラ空ジタゾ。香巖ノ擊竹、靈雲ノ見桃花モ同

ジ物ゾ。

D 太雅松風^{ニモ}無^レ此^ノ声

蛙声^デヤト云テアナドルナ。太雅ノ松風モ、此ノ蛙声

ニハヲトリゾ。太雅ト松風ト二ツニ見ルハ惡^ルシ。松風

ガ琴ノヤウヂヤホトニ、太雅ノ松風ト云也。是真ノ教

体也。清浄在^レ音聞^ニ之義也。

【66】注

(1) 月林観禪師……蛙戴苔ⅡA句の典拠を示す。月林禪師は頭に苔の生えた蛙が跳んで鳴くのを見て大悟し、「蛙戴苔」といつも言っていた。『増集続伝灯録』巻一の「蘇州万寿月林師観禪師」の章や『月林録』の塔銘にこの話は見えず、何に拠ったか未詳。月林師観(一一四三～一二二七)は臨済宗楊岐派。大洪祖証に嗣ぐ。

(2) 咄々者、蛙鳴声也ⅡA句の「咄々」を蛙の鳴き声の擬音語であるとするが、何に拠ったか未詳。『首書』で統翠(江西龍派)は「咄々無蛙声」とする。

(3) 張侍郎九成……蛙の声を聴いて大悟した故事として、張九成を挙げたもの。張九成は宝印楚明から「庭前柏樹子」の公案を与えられ答えを出せずにいたが、ある夜、廁で蛙の鳴く声を聴いて意味がわかった。『嘉泰普灯録』巻二十三、侍郎張九成居士に「聞宝印楚明禪師道伝大通、居淨慈。即之。……復拳趙州柏樹子話、令時時提撕。公久之無省。……一夕如廁、以柏樹子話究之、聞蛙鳴寂然契入。有偈曰、春天月夜一声蛙、撞破乾坤共一家、正恁麼時誰會得。嶺頭脚痛有玄沙」(統藏一二七・一六二b～c)とある。

(4) 古德云……為汝發機云々Ⅱ蛙の鳴き声のような普通の物音が太悟のきっかけとなることを示し、C句の「機頓発(Ⅱ發機)」の用例を挙げたもの。『聯灯会要』巻十五、保章仁勇の章に「示衆、拳古德云、文殊門入者、墻壁瓦礫、為汝發機。觀音門入者、蝦蟆蚯蚓、為汝發機。普賢門入者、不動步徧十方」(統藏一二六・三三七a～b)とある。『聯

灯会要』巻二十六、福州安国惠球禪師の章には「示衆云。……若從

文殊門入者、一切草木瓦礫、助汝發機。若從觀音門入者、一切蝦蟆蚯蚓、助汝發機。若從普賢門入者、不動而到。我以此三門。方便示汝」(統藏一二六・四三二)とあり、欄外注はこゝを引用している。

(5) 大雅者古曲也ⅡD句の大雅を「古曲」とする。『詩經』大雅とは関連づけていない。

(6) 大雅与松風、共不及蛙声鼓吹也Ⅱ古曲と松風はともに蛙の聲が大悟の契機になるのに及ばない。

(7) 松風即大雅、大雅之松風也Ⅱ松風は古曲(Ⅱ大雅)のような雅な響きがある「大雅の松風」である、とする。樂府、琴曲歌辭に「風入松」がある。

(8) 大雅作而淫蛙沈声、猗絃鼓而衆音絶響Ⅱ『詩經』大雅が作られて淫蛙の聲はしなくなり、猗絃が鼓されて他の多くの音は響かなくなった。すばらしい音がすれば他のものは黙ってしまう。「淫蛙」は、「鄭衛之音」が淫猥な音であったこと(『礼記』樂記など)をふまえるか。「猗絃」は獅子の毛で作った絃。

(9) 空諸有者……伝灯八ⅡC句「空諸有」への注で、龐居士の遷化の際の言葉を引き。『景德伝灯録』巻八の原文は「空諸所有」で、あらゆる物を空と観じること。原文は「州牧于公問疾次。居士謂曰、但願空諸所有、慎勿実諸所無、好住世間皆如影響。言訖枕公膝而化」(大正蔵五一、二六三c)。

0067 送横川住能仁

【京大本略註】

(一二三) 四明子元々和尚

師⁽¹⁾、諱祖元、字子元、後改号無學。本朝文永七年来朝、道合相州⁽²⁾元師^(師カ)平氏、請住円覺寺為開山。賜号仏光禪師。嗣無準範禪師。在大宋、住真如禪寺。明州人⁽³⁾也。

(67) 送⁽⁶⁷⁾横川住能仁^(三)

横川、諱行珙、嗣礼滅翁、松源⁽⁴⁾之孫也。初住温州雁蕩山能仁⁽⁵⁾寺。

A 百戰⁽⁶⁾金吾出⁽⁷⁾鳳城⁽⁸⁾

B 不⁽⁹⁾論⁽¹⁰⁾滅⁽¹¹⁾爾⁽¹²⁾電⁽¹³⁾与⁽¹⁴⁾添⁽¹⁵⁾兵⁽¹⁶⁾

C 夜深⁽¹⁷⁾蕩月涼⁽¹⁸⁾如⁽¹⁹⁾水⁽²⁰⁾

D 誰⁽²¹⁾聽⁽²²⁾虛弓落雁⁽²³⁾声⁽²⁴⁾

以横川比金吾也。百戰者、謂慣法戰底作家禪將也。坡詩云、先声已動越溪山之意乎。職林、秦中尉掌微循京師、備盜賊。漢武帝更⁽²⁵⁾名執金吾。顔師古曰、金吾、鳥名。主⁽²⁶⁾辟不祥。天子出行、職主先導、備非常。故執此杖象鳥、因以名官。古今註、金吾、金輻棒也。漢執金吾亦棒也。以銅為之、金塗兩末、謂之金吾。唐有左右金吾衛上將軍。滅⁽²⁷⁾鼉者、史記孫臏与龐涓俱學兵法。涓事魏惠王為將軍、恐臏賢於己、以法斷其兩足。臏見齊將田忌、々喜而客待之。其後魏攻韓、々告急於齊、々使田忌救韓。臏為忌謀曰、使齊軍入魏地、為十萬竈、明日為五萬竈、又明日為二萬竈。龐涓行三日、大喜曰、吾固知齊軍怯。入吾地三日、士卒亡者過半。乃棄其步車与輕銳、倍日併行、遂之。孫臏度其行、暮当至馬⁽²⁸⁾陸。々々道陝而旁多阻隘、可伏兵。乃斫大樹、白而書之曰、龐涓死於此樹之下。於是令齊軍善射者万弩夾道而伏、期日暮見火举而俱發。龐涓果夜至斫木下、見白書、乃鑽火燭之、読其書。未畢、齊軍万弩俱發。魏軍大乱相失。龐涓自知智窮兵敗。乃自頸曰、遂成豎子之名。齊国乘勝、尽破其軍、虜魏太子申以帰。孫臏以此顯其名、而世伝其兵法云々。添⁽²⁹⁾兵者、虞詡⁽³⁰⁾羌寇武都、詡令⁽³¹⁾吏士各作兩竈、日増倍之、卒破羌、示強也。蕩月者、雁⁽³²⁾蕩山上月也。戰⁽³³⁾国策、魏春申君曰、日者更瀛謂魏王曰、臣能虚発而下鳥。有鴻雁從東方来、更瀛以虚弓下之。王曰、射爾至此乎。更瀛曰、此麋也。其飛徐而鳴悲者、創痛也。悲鳴者久、

失群也。故瘡未息而驚心未去、聞弦音烈而高飛。故自隕也。今臨武君嘗為秦ヒコハヘ、可為秦之將。坡詩、先声落虚弦。此^①
偈以横川比戰將、謂師到雁蕩勘驗學者、亦猶虚弦落帶*傷之雁。其誰先中得去哉。或*謂、雁山徒衆工夫純熟之時節、得
横川開堂、便当中箭去也。或有不待行*令向言前薦得者也。又雁宕山故云落雁声。

〔欄外注〕

真如在台州。

鳳城、或云杭州鳳凰山在城中。下瞰大江直望海門。今大內在焉。

宋朝南渡、駐蹕于杭州。又利州西路鳳州郡名鳳城。勝六十九。

或作庚盈。々々侍魏王、見一雁過曰、臣能揺弓而落。乃彎弓、雁即落。見于家語。

張祐詩、万人齐指処、一雁落寒空。

〔傍注〕

題 横川恐ハ蜀人歟。

C 此山ニ住スル時節底也。

D 此衆ノ中ニ何人カ横川ノ虚弓ヲ聴得ン。

〔出典〕

『仏光国師語録』卷二・台州真如寺語録に「送横川主雁山靈巖」として収められる（大正蔵八〇・一四二a）。本文同じ。
卷十所収塔銘には、徳祐初年（一二七五）に用潜覚明撰の行状「当元朝兵馬入台温時、已退蔵於雁山能仁」を挿入、それに「時
琪横川入寺之四年也。横川自靈巖遷能仁」と割注を付し、さらに「師有送横川主雁山靈巖頌云」として本偈を掲げる（大
正蔵八〇・二四七b）。『貞和集』卷四・住院にも「横川住雁山靈巖」の題で収める。第三句「天高蕩月」に作る。なお大義
写本は「天高宕月」とする。

以上のように、信頼できる他文献では靈巖寺住持の際の送行偈となっており、本書においてなぜ能仁寺と誤られたのか
は不明。

【校異】

*元師―者元師、*也―也真如寺在台州久在虛堂之裡為飽參、*之―ナシ、*寺―寺行或作如珙、*辟―辟、*陸―陸、*吏―史、*蕩―ナシ、*創―瘡、*傷―腸、*謂―云、*令―今（元師・也・寺の異同については『訓解添足』が後人の付加あるいは衍字であると指摘済）

【大義写本】

（二三）四明元子元和尚

嗣無準。仏光禪師也。元元之義也。後号無学。（水カ）文和七年来于本朝、道合相州太守、創開円覚寺。在太守国、住真如寺。

（67）送横川住能仁岩山竹庵

革律寺為禪院。金吾、官也。武官也。顔師古曰、金吾、鳥名。主辟不祥、天子出行、職主先導、備非常故、執此杖象鳥、因以名官。古今注、金吾、金輻棒也。漢執金吾亦棒也。以銅為之、金塗兩末、謂之金吾。唐有左衛將軍金吾云々。

A百戦ノ金吾出ニ鳳城ヲ

B不レ論滅レ電ヲ与レ添レ兵

C天高テ岩月涼シ如レ水

D誰聴カ虚弓落雁ノ声

送横川住能仁。温州雁蕩山能仁也。宕、蕩同也。金吾、漢時大將軍名也。曾慣百戦老將軍、為征辺国、出鳳凰城。

【略註鈔】

（二三）四明子元和尚

鳳凰城者、王都也。法戰場、老法將去鎮雁山、今出大叢林也。按本伝、孫臏、孫武子後、善兵法。設滅竈之法、敗臄涓於馬陵、以此名顯天下。世伝其兵法。滅竈者、滅竈□營中、敵人望見、將謂逃去者多。營中密添兵、敵謂營中空虚来攻、營中兵甚多。伏兵於馬陵、敗魏龐涓□。孫臏將也。虚弓、楊由無箭而發絃也、時雁落也。指横川也。

【欄外注】

宕月、雁蕩山月也。陸放翁詩序云。

陸放翁詩、序云、能仁院前有石像丈余、蓋作大像時様也。詩云、江閣欲開千尺像、雲龕先此定規模。斜陽徒倚空三嘆、嘗試成功自古無。

鎌倉、円覚寺開山仏光也。無学祖元トモ云也。日本文永七年二日本へ渡ラレタゾ。唐土デハ真女ニ住セラレタ

ゾ。日本ノ人ガ夢ニ聖者ガ日本ヘ来ルト見タレハ、仏光ノ渡ラレタゾ。仏光ハ天台人ゾ。羅漢ハドコニモアレトモ天台ガ本ゾ。初果カラ二果三果四果ノ聖者ヲ無

学ト云ゾ。四果ヲ証スルガ羅漢果ヂヤホトニ、無学ト号セラレタナリ。又子元和尙大元ノ乱ノトキ、敵軍来テ頸ヲ切ントス。元云、凡ソ僧タル者ハ、死スルニ及テ辞世ノ頌ヲ作ル物ゾ、且待テ、トナリ。アレハ軍兵且ク待ツナリ。即辞世云、乾坤無_レ地_レ卓_ル孤_ル策、且善_シ人又_テ法空、珍重_ス太元三尺_ノ劍、電光影_ノ裡_ニ截_ル春風。軍兵此ノ頌ヲ聞テ扶_ル也。兵問テ云、何人ゾ。元曰、吾_レハ子元ト云者也。東南ニ当テ吾ガ叔父坊主アリ。願クハ其_ノ処ヘ送レ、トナリ。兵便チ舟ヲシタテ、贈_ル日本_ニ也。其トキ鳥有_リ。多ク来テ船ニ著ク也。卒風ニ逢_フトキハ、此ノ鳥向_テ風ノ面_ニ風ヲ防グ故ニ、無_レ難来朝ス。元云、此ノ鳥ハ何鳥ゾ。日本人答テ云、是_レハ八幡ノ使者鳩ト云鳥也。定テ御迎ニ參ルナルベシ、ト云也。又貞和集ニ、餞_ニ真如_ノ無_レ学_ノ膺_ニ日本_ノ福_ノ山_ノ之命_ト云題テ、頌カニツアルゾ。サルトキハ、日本ヨリ請セラレテ渡テマリヤルトモ見ヘタゾ。

(67) 送_三横川_ノ住_ニ能仁_ニ
A百戰ノ金吾出_レ鳳城_ヲ

金吾ハ日本ニ左衛門右衛門ト云官ゾ。京ノ中ヲ回ツテ

盜賊ナトヲ防グゾ。爰デハ横川ヲ戰イニ慣タ武士ニ比スルゾ。今出世シテ行カル、ナリヲ喻タゾ。

B不_レ論_ニ滅_レ電_ノ与_レ添_ル兵_ヲ

史記ニアルコトゾ。滅_シ電_ヲテ敵ヲ亡スモアリ、又添_ル兵_ヲテ敵ヲ亡スモアルゾ。ソレハ常ノ大将ノワザナリ。サテ是ハ勢ノ多少ニハヨラスゾ。

C夜深蕩月涼如水

今雁蕩山ヘ住ニ行クホトニ、蕩月ト云也。雁蕩山ノ月ノ涼イ時分、

D誰聽虛弓落雁_ノ聲

雁ノ虚弓ニ落ルヤウニ、不_レ煩_レ一箭_ヲシテ射落シテ、敵ヲ平ントナリ。横川₂₇好イ知識ヂヤホトニ、説法ヲモセス、一言ヲモ下ヌ先キニ、学者ヲ会得サスルヤウニ接セラレウストナリ。誰聽クトハ、未_レ施_ル一言以前ニ誰カ悟ウズソトナリ。誰₂₈カ聽ントヨムトキハ、一棒一喝ヲモ行セズ、接_ル人_ヲ手段ガ高イホトニ、誰_レテモ横川ニヨリツク者ハアルマシイト云義ゾ。雁₂₉ノ虚弓ニ落ルハ悪イコトヂヤヲ、ナゼニ学者ノ悟ルニ譬タゾ。ナレハ、吾ガ家ヘデハ、大死底ノ人トナラスンハ悟ラレマシキノ。

【(67) 注】

- (1) 師諱祖元……明州人也。無字祖元(一二二六—一八六)。子元は字、無字は号。慶元府(四明・明州とも。現在の浙江省寧波市)鄞県の人。杭州淨慈寺の北磻居簡のもとで出家、徑山の無準師範の法を嗣ぐ。その後石溪心月・偃溪広聞・虚堂智愚らに参じ、咸淳五年(一二六九)台州(浙江省)真如寺住持となる。徳祐元年(一二七五)元軍を避けて温州能仁寺に移り、その後天童山首座となる。至元十六年(弘安二年・一二七九)相模守・執権北条時宗の招きにより来日(なぜ文永七年と誤ったのか不明)、建長寺住持を経て、弘安五年(一二八二)円覚寺開山となる。寂後仏光国師号が贈られる。『仏光国師語録』卷三・建長寺語録の巻頭には北条時宗の招請状を掲げるが、その書き出しに「日本国副元帥平時宗」とある。これは、幕府を元代の征討軍事機構「都元帥府」に擬して、將軍の補佐役である執権をその副官「副元帥」に当たるものとしたのであろう(『元享釈書』卷七・道隆および卷八・祖元でも、それぞれ時頼・時宗を副元帥と呼んでいる)。卷十所収行状類では「平將軍」「將軍平公」などと格上げして呼ばれるが、無字の建長寺入寺法語では將軍惟康を「大將軍都元帥国公」、時宗を「相模太守都総管」都総管は宋代の広城軍事機構の長と呼んでいる。それぞれ日本名と唐名を併称して征夷大將軍・相模守を表したもので、あくまで朝廷から与えられた正式の官職に限定している。(中国の官名については『事文類聚外集』卷六・統軍司部を参照した)
- (2) 横川……能仁寺。横川如珙(わんせん)によこう、法諱は行珙とも、一二二—一八九。永嘉(現在の浙江省温州市)の人。滅翁文礼の法嗣、松源崇岳の法孫。咸淳四年(一二六八)、淨慈寺首座より温州雁蕩山靈巖禪寺住持、同八年に能仁寺住持。後に阿育王山住持となる。
- (3) 百戦……禪将也。禪問答はしばしば戦争に喩えられる。ここでは厳しい問答をくぐり抜けてきた横川を百戦錬磨(あるいは百戦百勝)の武將に喩えている。
- (4) 坡詩……意乎。『東坡先生詩』卷二十一「送穆越州」に「旧政猶伝蜀父老、先声已振越溪山」とある。穆珣が越へ赴任するときの送別詩で、以前蜀における政治を今も土地の長老たちが語り伝え、まだ赴任する前からその評判は越の山川に響き渡る、の意。注(10)の坡詩と同様、D句に関連する表現として引用したか。
- (5) 職林……上將軍。『漢書』卷十九上・百官公卿表第七上に「中尉、秦官、掌徼循京師(如淳曰、所謂遊徼、徼循禁備盜賊也)(下略)」(中略)武帝太初元年更名執金吾(応劭曰、吾者、禦也。掌執金革以禦非常。師古曰、金吾、鳥名也。主辟不祥。天子出行、職主先導、以禦非常。故執此鳥之象、因以名官)」「古今韻会舉要」卷三・上平八虞韻・吾にこれを節略して載せる。『古今註』に「車輻、棒也。漢朝執金吾、亦棒也。以銅為之、黃金塗兩末、謂為金吾」とある。『太平御覽』卷二二七・職官部三五・左右金吾衛將軍には『漢書』を引くほか、「(唐)龍朔二年改為左右金吾衛置大將軍一人(下略)」と

もある。全体をまとめて記す文献は未詳。『職林』も未詳。

(6) 滅竈者……其兵法云々『史記』卷八十五・孫子呉起列伝第五にはほぼ同文(一部省略がある)を載せる。孫子死後約百年にして生まれた子孫の孫臏は龐涓とともに兵法を学んだが、先に魏の將軍に仕えていた龐涓は、その才能を恐れて足斬りの刑に処し、人前に出られないようにした。しかし斉の將軍田忌は彼を客分として待遇した。たまたま魏が韓を攻め、斉に救援要請が来て田忌が赴くことになった時、孫臏は斉軍を魏の領地に侵入させ、竈を十万・五万・三万(略註は大義写本とも二万とする)と日ごとに減らして、兵士が逃亡して少なくなっているように見せかけた。勢いづいた斉軍は武器を捨て身軽になって進撃し、馬陵までやってきた。孫臏は、道が狭くなっているところの大樹を切らせ、「龐涓がこの木の下で死んだ」と白い字で書かせた。その周囲に弓矢の名手一万人を伏せ、日が暮れて火が見えたら一斉に射かけるよう指令した。夕暮れにここを通りかかった龐涓は、字を読もうとして松明を灯したところ、読み終わらないうちに伏兵の襲撃に遭って魏軍は壊滅、龐涓は「あいつに手柄を立てさせてしまった」と言つて自害した。斉は勢いに乗つて魏を攻め、太子申を捕虜にした。これによつて孫臏は有名となり、その兵法は後世に伝えられた、というもの。

(7) 添兵者……示強也『後漢書』卷五十八・虞傳蓋臧列伝第四十八を大幅に節略して引く。虞詡は異民族の羌の侵入を防ぐため出兵するが、援軍を待つふりをして日夜兼行日に百里以上進みなが

ら、兵士たちに竈を一人二つ作らせたため、羌は近づかなかつた。ある人が「孫臏は竈を減らしたのにあなたは増やした。進軍は遅い方がよいのに今日などは二百里も進んだ。なぜなのか」と尋ねたところ、「敵は多勢、こちらは無勢だ。ゆっくり進めばすぐに気づかれるが、速く進めばわからない。竈が増えているのを見れば、援軍が来たと思ひ、追撃を止めるだろう。孫臏は弱いように見せかけたが、私は強さを見せている。だから違うのだ」と答えた、というもの。

(8) 蕩月者雁蕩山上月也『蕩月』王安石「月夜二首その二」に「踏月看流水、水明揺蕩月」とある(『臨川先生文集』卷一)ように、通常は水に映つて揺らめく月を言うが、ここは雁蕩山に上つた月の意、とする。

(9) 戦国策……秦之將『戦国策』に「天下合従、趙使魏加見楚春申君曰、君有将乎。曰、有矣、僕欲将臨武君。魏加曰、臣少之時好射、臣願以射譬之、可乎。春申君曰、可」とあつてこの話に続く。秦を連合して攻めるのにふさわしい武将として春申君から臨武君を推薦された魏加は、更羸の逸話を持ち出す。彼は魏王に対して、矢を射ずに雁を射落とそうと言う。しばらくして飛んできた雁に矢を射る真似をすると、雁が落ちてきた。驚いて訳を聞いた魏王に対し、これは雁が臆病(負け犬)だからだと答える。飛ぶのが遅く、鳴き声が悲しいのは傷を持っていて群れから離れてしまった雁であり、弓を射る弦の音を聞いただけで怯えて高く飛び続け、力尽きて落ちたのだ、というわけである。臨武君もかつて秦に敗れた経験があつて

臆病になっているので、武將としてふさわしくない、と魏加は進言するのである。「藥」は通常切り株、あるいはそこから生えたひこばえの意だが、ここでは負け犬の意に取った(『訓解添足』では「キツ、クル」と訓む)。注の文章の末尾が「可為秦之將」とあるのは、「不可為拒秦之將也」を誤って節略したものである。

- (10) 坡詩先声落虚弦 、『東坡先生詩』卷二十二「送范中濟經略侍郎、分韻賦詩、軾得先字、且贈以魚枕杯四、馬箠一」に「号令聳毛羽、先声落虚弦」とある。西夏に近い地方へ派遣される人へ贈った送別詩で、彼らもあなたの名声には戦わずして服従するだろう、の意。
注(9) の故事を踏まえる。

(11) 此偈……去哉 詩意を説明する。横川を武將に喩え、彼が雁蕩山に赴いて僧侶たちと一戦交えるのは、まるで弓の音だけで傷つけた雁を射落とすようにたやすいことで、誰もが打ち落とされるだろう、の意とする。

(12) 或謂……去也 第二の説。雁蕩山の僧侶たちは修行がちょうど熟してきたところで横川を住持に迎えたから、彼の指導を受けて皆射落とされる(悟りを開く)だろう、の意とする。「行令」は接化指導の意。

(13) 或有……者也 第三の説。もう赴任する前、一言も発する前から悟りに導いている(から、弓の音など必要ない)、の意。

(14) 又雁……雁声 雁蕩山にちなんで「落雁」を持ち出した、の意。
注(8) と同様の考え方。

(15) 鳳城……在焉 』A句の「鳳城」について、南宋の都臨安(杭州)城内にある山とする説。「在城中」以下は『方輿勝覽』卷一・臨安府にある鳳凰山の引用。横川は臨安の浄慈寺にいたので、鳳城を都の臨安と見るのは正しいが、鳳凰山に由来するというよりは、一般に都を指す語として用いているだろう。

(16) 又利州……勝六十九 』『方輿勝覽』卷六十九・利州西路・鳳州の郡名として鳳城が見える。

(17) 或作……家語 』『事文類聚後集』卷四十六・羽虫部・雁に見える。ただし庚ではなく、更に作る。

(18) 張祐……寒空 』張祐の五言律詩「觀徐州李司空獵」の尾聯。『五灯会元』卷十八・雲巖典牛天遊禪師章などにも見える(統藏一三八・三四d)。「五灯拔萃」(花園大学国際禅学研究所・電子達磨#2所収)では「古詩句也。諸人指処、必有落雁之手。李広將軍是也」と注している。

(19) 此山……底也 』雁蕩山に住するときの季節を描写している、の意。『略註抄』にも同様の指摘がある。

(20) 此衆……聽得 』注(11) (13) とはまた別の説で、せっかくの弓の音(横川の指導)も聞く耳を持たない僧侶たちには効き目がない、の意。「誰聽」を反語と捉えている。

(21) 陸放翁……古無 』『劍南詩稿』卷三に収める。能仁寺の関係で引用したのみで、偈の内容とは関わりないか。

(22) 日本人……渡ラレタゾ 』不明。龍門文庫本にも見える。注(24)

に引いた夢に続いて、「巨山和尚録序」ではもう一つ、在宋中に見た夢（師の無準の説法を聴いていると西北の隅の蠟燭の火が東南の隅に飛んで四方を明るく照らしたので、偈を作った。後に日本に渡って建長寺に入った時、時宗が達磨像を送ってきた。その賛は無準のもので、末尾の一句が自分の作った偈と同じであった。その偈の内容は日本へ渡ることを暗示していた、というもの）を記している。見る人も内容も異なるが、注（24）の「東南ニ当テ」という表現とも合わせ考えると、これを変形させたものと言えなくもない。

（23） 仏光ハ……号セラレタナリハ小乗仏教において修行の階梯を示す四向四果のうち最上位の四果を阿羅漢果また無学とも言う。道号「無学」の由来を述べているが、祖元を天台の人とする根拠は不明。むしろ天台山の石橋近くに五百羅漢が住むという伝説があることから、無理矢理結びつけたか。これも龍門文庫本にも見える。

（24） 又子元和尚……ト云也ハ前半は有名なエピソードで、『語録』卷十・塔銘等では、至元一三年（一二七六）、能仁寺に元兵がやってきて無学の首を刎ねようとしたとき、腰掛けに座し、顔色一つ変えずにこの偈を唱えたため兵は礼拝して去ったという。兵に送られたという話はそれらにはない（「叔父坊主」は法系上の叔父、すなわち師匠の兄弟弟子の意であるが、たとえば蘭溪道隆は無学とは師匠の師匠同士が兄弟弟子の關係であり、法叔には当たらない）。後半、鳩が風よけになって無事渡海できたという話も塔銘等にはないが、卷十「巨山和尚録序」には「師一日謂徒云、吾本不欲至此国、

而有些子因縁。所以至於此也何也。吾在大宋日、於禪定中、嘗見神人。峨冠袴褶、手執圭簡、奇偉非常。至於老僧前告言、願和尚深愍衆生、降臨我邦。如是數回、然吾不以為事。每此神人至時、先有金龍一頭、來入袖中。亦有鴿子一群、或有青者或有白者、或飛或啄、或上膝上、猶是不測其由。然後未幾有此國人、來言、日本平將軍請吾。吾以此之故而來此国。雖然亦未了其源由。偶一日有人、告吾言、当境有神、名曰八幡大菩薩。和・既至此間、可詣燒香一遭。所以因而參詣於宮前、徘徊処仰觀棟梁上、有木造鴿子兩三對。因而問、其鴿子是何侍人。答云、此乃是此神之使者也。於是始悟此神預來宋朝、相邀老僧。老僧尋常不欲容易之。汝等知之乎。汝等欲造老僧頂相、可以於老僧膝前袈裟上、令画工画鴿子一對、金龍一頭、以表往年之識耳。今塔頭頂相、袈裟上鴿子、袖上金龍、見存焉」（大正藏八〇・二三五c）とあり、宋にいたとき夢に神人と金龍と鳩を見たのは、八幡神があらはじめ迎えに来ていたのだ、という奇譚を自ら語っていて（「元亨釈書」にも引かれる）、これが変形したものか。

（25）「貞和集」卷四に一峰□齊「饒真如無学膺日本福山之命」二首あり。本文は「万松吟歩独遲遲、心与身閑道自肥、一對驗人双碧眼、眉間掛劍力韋希」「石橋五百聞退舍、泛舶來迎過海東、黄金不鑄黄金像、去起東山臨濟州」。福山は巨福山建長寺。

（26）金吾ハ……防グゾハ金吾は左右衛門府の唐名。市中ではなく宮門の警備を担当する。檢非違使別當・佐が衛門府の役人を兼ねていることが多いため、混同したか。

（27）横川……悟ウズソトナリ注（13）の説に近い。

（28）誰カ聴ン……ト云義ソ注（20）の説に近い。

（29）雁ノ……マシキソ雁が落ちて死ぬというよくないことに悟りを

を喚えるのはなぜだ、という疑問に対して、禪宗では何もかも捨てて死んだも同前になって初めて悟りに至るからだ、と答えている。

「大死底」は『碧巖錄』第四十一則「趙州大死底人」などに見える常套表現。

【補説】

『略註抄』にしか見えない説が龍門文庫本と共通するところが興味深い。『略註抄』が単に略註をかみ砕いて述べるのにとどまらず、他の抄物も参照して独自の内容を増補していることが明確にわかる例である。なお、龍門文庫本の無学相元略伝部分は、大義写本のそれとほぼ一致する文章を載せる。すなわち芳郷や彭叔ら五山僧の見ていた略註の本文が京大本（寛永版本）ではなく大義写本に近いことを示すもので、『0047水庵生縁』の注（4）で指摘したことが裏付けられた。

なお、上村観光『禪林文芸史譚』（一九一九刊、『五山文学全集』別巻所収復刊、思文閣出版、一九七三）の「古抄中に見えたる古徳の遺事」には、大徳寺六十一世天琢宗球が明応七年（一四九八）に行った江湖風月集講義の抄本の次のような部分が引用されている。

四明子元々和尚、明州奉化県人也、子元者、元ノ義ソノ後二号「無学」、文永七年来「于本朝」、道合「相州太守」創「開円覚寺」、

仏光禪師是也、嗣「無準禪師」、在「太宋住真如寺」、（中略）唐土テ出世ハトコマテナレハ真如ト云、後二無学トカヘラレタソ先代ノ人、夢ニ聖者カ日本ヘ来ト見テアリタルハ、仏光ノ渡ラレタ、原ニ此夢「仏光天台ノ人」ゾ羅漢モ天台カ居処也、初果ニ果三果カラ四果ノ聖者ヲ無学ト云、名ヲ無学ト云ホトニ合タソ、私（天琢）曰ク、仏光、身テハ羅漢ノ化現トハイワレトモナキノ、其子細ニハ、大燈国師ヲ有ル僧云、和尚ハ観音ノ再来ト人皆申スト云、国師云観音ハ十地菩薩ニテアル程ニ、サカリタル者ナリ、我カ光ヲ借テコソ観音ハ世ニ出タレ、我ヲ観音ノ再来トハ、バカ類ケナコトヲ云トテ座敷ヲ躍タツル也、（読点原文のまま、漢字は現行のものに変えた）

冒頭の漢文は『略註』大義写本とほぼ等しい。「夢ニ」以下、無学の道号の由来を述べる部分は『略註抄』も近いがむしろ龍門文庫本と細かな表現までほぼ一致する。東福寺の抄物である龍門文庫本に、妙心寺系の『略註』のみならず、大徳寺系の抄物も影響を与えていたことがわかる。

0068 聽猿

【京大本略註】

(68) 聽^レ猿^ヲ

本録作靈隱聽猿送僧歸蜀。

A 万里^ノ吳江万里^ノ天

B 尽^ク將^テ客恨^ヲ送^ル歸船^ヲ

C 一声分^テ作^リ一二三声^ト了^{レリ}

D 誰^カ在^ル巴山暮雨^ノ前^ニ

靈隱在錢塘江畔、故云吳江。^③此頌、叢林盛伝、本是送僧歸蜀偈也。今用聽猿為題。起頭二句、是送行之句也。第二句謂猿声也。^④
第一声催客淚、第二声沾客襟、第三声斷客腸。凡猿声之生客恨如此、何況於巴山暮雨辺乎。^⑤或云、万里江天、無限客情、可知矣。更聽猿声、何人歸船不載愁去。冷泉亭前聽猿猶如此。何況聽數声於巴山雨乎。想夫難禁耳。^⑥古詩、巫峽蒼々烟雨時、寒猿啼在最高枝、自是愁人腸先斷、由来不是此声悲。

【欄外注】

吉師老、放猿詩、啼時莫近瀟湘岸、明月孤舟有旅人。

猿声之悲也、一声兩声、猶不可禁、何況三声哉。下義第一第二声之說、不是。

【出典】

『仏光国師語録』（大正蔵八〇・二四五a）、但し題を「冷泉聽猿」に作る。ほかに、『元亨釈書』卷八に見え、AB句が『点鉄集』卷下にみえる。

【校異】

【大義写本】

(68) 聴猿^ヲ

戦国策、魏^(ウイ)謂^(イフ)春^(申カ)中君曰、日者更羸。謂魏王曰、臣能虚^{ウソ}羸而下鳥。有鴻雁從東方來、更羸以虚弓下之。王曰、射尔至此乎。更羸^(更カ)此孽也。其飛徐者、痛瘡也。悲鳴久失群也。故瘡未息而驚心未去。聞絃音高飛、故自隕^(ツル)也。故瘡怯、今臨武君嘗為秦孽、不可為拒秦之將、云々。

A 万里ノ呉江万里ノ天

B 尽將^ヲ客恨^ヲ送^ル帰船^ニ

C 一声分^{レテ}作^リ三声^ト了^ル

D 誰^カ在^ニ巴山暮雨^ノ前^ニ

此頌、叢林盛伝、本是送僧帰蜀、今用聴猿之題。起頭二句、是送行之句也。下二句住靈隱听猿頌也。

【欄外注】

□江出岷山至潯陽、分為九道、其一流入蜀也。

【略註鈔】

(68) 聴猿

名譽ノ頌ゾ。靈隱ニ聴^レ猿^ヲトアルゾ。

A 万里ノ呉江万里ノ天

B 尽將^ヲ客恨^ヲ送^ル帰船^ニ

靈隱ハ、呉ニ近イホトニ、万里ノ呉江ト云也。万里ノ呉江ノ上ニハ、万里ノ天ナラテハ無ソ。渺々トシタ底ゾ。客裡デハ、何事モ恨ゾ。不^レ帰郷^ニホトニ、恨ガ多イゾ。況ヤ我ハ客裡デ居タニ、人ノ帰船ヲ送ルホトニ、悲ウ無フテハ。言^ハ、我ハ未^レ悟、人ノ悟ヲ見テ羨ムナリゾ。カウ云ヘバトテ、仏光ノ未^レ悟作ラレタデハ無ゾ。我ハ悟テ、未悟ノ者ニヨソヘテ作ルナリ。是モ学者ヲ化導ノ心ゾ。

C 一声分^{レテ}作^リ三声^ト了^ル

是ホトニ哀イホトニ、一声聞ケハ、三声聞クホトアルゾ。猿ハ一声ニ催^レ客涙^ヲ、二声ニ沾^レ襟^ヲ、三声ニ断^レ客腸^ヲトアルガ、是ハ、一声ガ三声ホトアルソ。

D 誰^カ在^ニ巴山暮雨^ノ前^ニ

コ、ノ猿声ノ悲シイサヘアルニ、巴山ノ猿ハ尚モ悲シカラウスホトニ、誰在——前トナリ。何ニトモコラヘ難カラントナリ。元ト是ハ、送^ニ僧帰^レ蜀^ニト云題也。靈隱ノ猿サヘ悲シイニ、巴山暮雨ノ前デハ、猶難堪カラント也。底心ハ、万里——天、本分ノ田地ヘハ遠而遠キナリ。尽將——船、未帰ノ客デ帰船ヲ送ルニ依テ、

恨ガアルゾ。帰船ハ、前ニ云如ク、悟得底ヲ云也。一⁽¹⁶⁾
声——了^ル、誰在——前、爰ノ猿サヘサビシイニ、巴
山ノ猿ノサビシイヲバ、何ントコラヘヤウゾ。元ト猿⁽¹⁷⁾
声ノ悲シキニアラズ、コチニ愁イガ有テ聞クニ依テ、
悲シキナリ。又一声——了ト云ヲ、巴山ノ猿ルニシテ
モ見ベシ。

【68】 注

(1) 本録作靈隱聽猿送僧歸蜀〓出典参照。『略註』には、外に同様の題材の偈頌が (12)「靈隱聽猿」(97)「聽猿」等に見える。また、『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』巻九には、同題の頌として愚溪「巴峽何如竺寺前、曉霜禁夢不成眠、一声啼斷西窓月、万里関山落枕边、古田「腸斷皆驚峽雨飛、北山烟靄合知時、声辺耳畔誰来往、白水一亭青樹垂」、虚谷「日月涼生青樹頭、一声声落水亭秋、幸而不在巴山聽、若在巴山聽更愁」の三首が収載されており、参考になる。

(2) 靈隱在錢塘江故云吳江畔〓第一句、吳江というのは、靈隱寺が錢塘江の畔に位置するからである。

(3) 此頌叢林盛伝……是送行之句也〓「聽猿」と題されてはいるが、もとより蜀へと帰って行く僧を見送る偈頌であり、起頭の第一二句は送行の句の体裁である。この頌は叢林に於いて盛んにもてはやされた頌である。「龍門文庫本」に「名譽ノ頌也。叢林ニモテアツカウ頌也。此題、或ハ靈隱「聽^レ猿トアリ」と見え、『略註鈔』も同様に注する。「夾山鈔」は、「古抄^ニ云々住^ニ靈隱^ニ時^ニ聽^レ猿^ヲ頌^{スト}也」とあり、更に欄外注に「一ノ句ハ、此ノ人ヲ、萬里ノ吳江カラ萬里ノ蜀ヘ送ル体ヲ云也」と見える。古抄の記事は、「大義寫本」にも見える。

(4) 第二句謂猿声……巴山暮雨辺乎〓第二句は、猿の鳴き声を、或いはその鳴き声もたらした効果を言う。猿の一鳴きは旅人の涙を誘い、その二鳴きを聞けば涙はあふれ袖をしとどに濡らし、その三鳴きを聞けば哀しみは極に達する。『說郛』卷六十五下所収章莊「峽

程記」に「三峡多猿故、酈道元曰、猿鳴三声断客腸」とみえる。

具体的には、三四句で言うように「略註」では、一般に猿の声がもたらす哀しみとして注するが、「龍門文庫本」「襟帯集」は、巴山の猿の鳴き声として注する。（8）参照。

- （5）或云万里江天……想夫難禁耳〓第二二句の解釈を補説する。これから蜀へ帰ろうとする僧は、この地での思い出や長い旅路への不安と期待が去来し、ただでさえメランコリックな感情に苛まれているのを知るべきである。更に猿の鳴き声を聞いたなら、どんな人でも帰りの船は憂愁の積み荷で転覆しかねない。しかしこれとても、靈隠寺冷泉亭辺のことに過ぎない、夕暮れ雨に煙る巴山でその数声を聞くのとは比べようもない。もはや耐え難く、絶望的と言えよう。「冷泉亭」は、『大明一統志』卷三十八に「靈隠寺 在武林山、晋咸和初建。寺有觀風・虛白・候仙・見山・冷泉五亭。（下略）」とある。
- （6）古詩巫峽蒼蒼……不是此聲悲〓『唐詩品彙』唐詩拾遺卷四に「竹枝歌三首（その二）」「萬首唐人絶句」卷五に「竹枝詞十一首（その八）に、劉禹錫の作として見える。注（17）参照。

- （7）吉師老、放猿詩、……孤舟有旅人〓『古今事文類聚』後集卷三十七に吉師老「放猿」詩、「放尔千山万里身、野泉晴樹好為隣、啼時莫近瀟湘岸、明月孤舟有旅人」と見える。

- （8）猿声之悲也……第二声之說、不是〓注（4）「三声」を段階的に解釈することを批判する。猿の鳴き声の悲しさを言っているだけであり、一鳴き二鳴きでも十分悲しいのに、ましてや三声ではなおさ

らの事だ、の意であるとする。

- （9）戦国策、魏謂……為拒秦之將、云々〓（67）頌の注（9）該当部分が誤って記載されたものと思われる。

- （10）江〓出浪山……一流入蜀也〓『韻府群玉』卷一、「江」の注に「（上略）江出浪山至楚都名南江、至潯陽為九道名中江（下略）」とある。
- （11）万里ノ呉江ノ……渺々トシタ底ゾ〓『龍門文庫本』に「万里ノ、万里ノ呉江ノ上ニハ、万里ノ天ナラテハ無ゾ。」と見え、「襟帯集」にも同様の記事が見える。

- （12）客裡デハ何事モ……悲ウ無フテハ〓『略註鈔』では、見送る人物を客僧の立場として注釈している。他寺に掛錫している客僧は、何事につけ恨みがましい。なぜなら自分は故郷に帰りたいのに帰れないから。ましてや自身が客僧の立場で、故郷に帰ろうとする僧を見送るのだから、悲しくないはずはない。

- （13）言我ハ未悟……化導ノ心ゾ〓第二二句の底心（内在する意味）は、自分は悟っていない（本郷に帰していない）ので、他者の悟道する（本郷に帰する）のを見て羨望する様を言う。『襟帯集』にも同様の注釈が見える。しかし、このように解釈するからと言って、仏光国師（無学祖元）が未悟のままでこの頌を作ったのではない。自分は悟道しているながら、未悟の者の立場に立って作ったのである。学者を教導する立場、却来（向去の対）、下化衆生の立場である。

- （14）是ホトニ哀イ……三声ホトアルゾ〓注（4）（8）参照。「龍門文庫本」では、「一声ノ、此ノ猿ノ啼クヲ聴ケハ、一声ガ三声ホ

第三句を巴山の猿の啼き声とする。

トカナシキノ。巴山ノ猿ハ、一声ニ催^レ涙^ヲ、二声ニ沾^ス襟^ヲ、三声ニ断^レ腸^ヲト云カ、コ、ノ猿ハ一声カ、巴山ノ三声ホトアルソ」とあり、霊隠寺冷泉亭辺に聞く猿の一声は、巴山のそのの三倍はあるとし、『略註』とは全く逆の解釈を取る。

(15) 底心ハ万里……悟得底ヲ云也。第一句は、本分の田地(悟り)への道程の遙かさを言い、第二句は、自分が未悟でありながら帰船(本郷へと帰る船、即ち悟道者)を見送ることから起^ルる羨望を言う。

【補説】 参照、

(16) 一声……コラヘヤウゾ注(4) 参照。「龍門文庫本」は、「誰在^ヲンー、言ハ、コ、ノ猿ノカナシサハ、巴山ノ猿ヨリモマシタホトニ、巴山暮雨ノ前ニ聴カ哀ト云者ハ、誰レカアラウソ」とあり、注(14) 同様に『略註』とは全く逆の解釈をしている。

(17) 元ト猿声ノ……悲シキナリ注(6) 参照。

(18) 又一声……シテモ見ヘシ注(16) とは、異なる解釈として、

0069 帰鶴

【京大本略註】

(二四) 台州敬之簡和尚*

(69) 帰鶴

A 水遠^{ウツク}沙明^{ニシテ} 倦翼垂^ル

B 冥々^{トシテ} 欲返^ス 旧栖^ニ 枝^ノ

C 綈衣露湿^テ 不知^{コトヲ} 重^シ

『江湖風月集略註』研究(五)(飯塚・佐藤・比留間・堀川)

【補説】

第一二句について、『夾山鈔』に「古抄^ニ云、住^ニスル靈隠^ニ時^ニ、聴^レ猿^ヲ頌^{スト}也。第一ノ之句面ハ、想^ニ像^ス万里ノ蜀路^ヲ。第二ノ之句面ハ、言^フ離亭ノ之恨^ヲ。続云、句中ハ、万里ノ呉江^{トハ}、指^ニ無辺ノ煩惱海^ヲ。万里ノ天^{トハ}者、指^ニ天真独朗ノ之性^ヲ。不^レ改^ニ煩惱海ノ体^ヲ而是^レ独朗ノ之性^{ナリ}也。尽^ク将^テ三界客作ノ恨^ヲ、送^ル返^リ本^ニ帰^ル源^ノ船^一。返本帰源ノ船ハ、其ノ意不^レ言^ハ而可^シ知^ル也。帰船^{トハ}者、承^ク第一ノ之句^ヲ、客恨^{トハ}、起^ス三四ノ之句^一とあるように、帰つていく僧を悟つた者、見送る僧を未悟の者とする点で共通する。続翠(江西竜派)は、「万里呉江」は無辺煩惱海(煩惱迷いの世界、未悟の境地)を指し、「万里天」は天真独朗之性天(全てがあらひのまま真実である世界、悟りの境地)を指すととして解する。

D 千尺ノ寒松到^レ頂^キ時^ニ

冥々、言杳冥也。阮籍、鶴賦、縞衣丹頂曉霜戒^レ之。蓋鶴ハ畏^レ露^ヲ者也。經^ニ千年^一之鶴、謂^ニ之丹頂^一、經^ニ二千年^一、謂^ニ之縞衣^一、經^ニ三千年^一謂^ニ之玄裳^一。縞素也。鶴事見相鶴經。

〔欄外注〕

或云、是仙禽欲返蓬萊乎。

〔傍注〕

C 「不知重」与凡鳥大別。

【出典】

典拠未詳。

【校異】

*尚—尚嗣癡絶冲

【大義写本】

（二四）台州敬之簡和尚

一作簡翁。台州簡翁、天童簡翁、諱居簡、法嗣痴絶。

雪豆簡翁、諱居敬、法嗣無準。

（69）帰鶴

A 水邊^リ沙明^{シテ}倦翼垂^ル

B 冥々^ルシテ欲^レ返^ニ旧栖枝^ニ

C 縞衣露湿^テ不^レ知^レ重^{コトヲ}

D 千尺ノ寒松到^レ頂^{トキ}時^ニ

鶴是仙禽、欲帰蓬萊也。古語云、住則孤鶴翹松頂、動

則片雲過人間。又縞白也。絶頂新秋生夜凉、鶴飛^{（翹）}松露

滴衣裳。又鴻飛冥々、云々。

〔欄外注〕

淵明、帰去来辞、有倦鳥之句。其辞云、鳥倦飛而知還、

云々。

〔欄外注〕

阮籍、雀賦、縞衣丹頂曉霜戒之。千年鶴曰丹頂、三年曰玄鶴、二年曰縞衣。縞者春心也。

〔略註鈔〕

(二四) 合州敬之簡和尚

(69) 歸鶴

A 水遠沙明（鶴カ） 倦翼垂ル

鶴ハ、元来仙禽ゾ。曾テ人間ニ下テ、又仙郷ニ帰ラントスルナリ。仙郷ヘハハルく「（10）」チヤホトニ、水遠キナリ。倦翼垂ルトハ、クタビレタル底也。

B 冥々（トシテ） 欲返（ニ） 旧棲ノ枝（ニ）

冥々ハ、ハルカノ義也。爰デ果テヤウズデモナシ。旧棲ノ枝ニ帰ラント思フ也。

C 縞衣露湿（テ） 不知重（キコトヲ）

鶴ハ、羽ガ白（ビ）物ソ。（11） 鶴ハ、露ヲ厭フ物デヤガ、帰フト思フ斗リデヤホトニ、露ノ湿テ重イヲモ知ヌソ。

D 千尺寒松到頂時

寒松ノ頂キニ到ルトキヲ思フニ依テ、露ノ重キヲモ不（レ）知也。又千尺ノ寒松ノ頂キニ至テハ、露ノ重ヲモ知ヌゾ。跡ノ功作ヲバ忘レタゾ。（13） 底心ハ、水遠——垂トハ、出世度生ニ倦ンタナリソ。冥々——枝、本分ヘ帰ラン

ト思フナリ。縞衣——重、千尺——時、本分ヘ帰ント思フニ依テ、説法利生ノ大儀ナヲモ不（レ）知也。又水遠——垂トハ、修行地也。冥々——枝、本分ヘ至ンコトヲ思フ也。縞衣——重、修行地ノ悲イト云コトヲモ不（レ）知也。故ハ、千尺——時、是非ニ本分ニ至ント思フニ依テナリ。此トキハ、位低キナリ。

ノ簡翁述スト云義モアリ。諱居敬ニテ、二人ナカラ簡翁ト称スルハ、尚書ニ、簡而敬之ト云語ニ、取之也。或此類、無準、法嗣ノ簡翁作ト云義アリ。可考之とある。

(5) 古語云住則……片雲過人間このままの形では見出せないが、類句が『明覺錄』卷六に「師南遊杭州、住持蘇州洞庭翠峯、嗣智門也。未幾曾公出守明州、手疏請師、住持雪竇資聖。蘇人固留不可。師曰、出家人止如孤鶴翹松。去若片雲過頂、何彼此之有」(大正藏四七・七二二c)と見える。また、『普庵印肅語錄』卷二に「孤鶴翹松頂、得意懶相陪」(統藏二二〇・二九九c)の句が見える。

(6) 絶頂新秋……松露滴衣裳『唐才子伝』卷五「任蕃翻」の伝に、「遊天台巾子峯、題寺壁間云、絶頂新秋生夜凉、鶴翻松露滴衣裳、前峯月照一江水、僧在翠微開竹房。既去百餘里、欲回改作半江水、行至題处、他人已改矣」と見える。明、徐勣『徐氏筆精』卷四によれば、後世、「再遊」「三遊」の絶句と共に「任翻幘峰寺三絶」と呼称されたという。

(7) 又鴻飛冥々云々『楊子法言』卷五「問明」に「鴻飛冥冥、戈人篡焉」と見える句。「龍門文庫本」に、「楊子」鴻飛「冥々」、云々。コ、テハ、冥々ハ、松ノ高ヲ云ト云義アレトモ、鴻「飛冥々」ノ語ヲ以テ見則冥々「二字ハ、ハルカニ高飛貌ト見テ、可歎」と見える。

(8) 淵明婦去来辞……飛而知還云々『陶淵明が役人生活に疲れて故郷に帰ろうとしたのは、鳥が飛び疲れて帰るべき所を知ると同様であり、A句の「倦翼垂」の典拠として、陶淵明の「婦去来辞」の

一句を比定する。

(9) 縞者春心也『典拠未詳』

(10) 倦翼垂ルトハクタビレタル底也『龍門文庫本』は「一日飛ビクタビレテ」と注し、『襟帯集』も「クタヒレタ体ソ」と注する。

(11) 鶴ハ露ヲ厭フ……重イヲモ知ヌソ『鶴は露を嫌うものだが、本の栖処に帰りたい一心で、露に濡れた翼の重さも忘れてしまつてゐる。』『襟帯集』によれば、「千尺」、コレハ穩坐スル処ソ。瑞溪曰、婦ト思ハカリテ、不知露重也」とあり、ここもあるいは瑞溪周鳳の解釈を踏まえるか。

(12) 寒松ノ頂キニ到ル時ヲ……跡ノ功作ヲバ忘レタゾ『鶴の本の栖処は、蓬萊にある年を経て古寂びた高き松である。そこに下り立つその瞬間だけを思つて飛び続けているから、露に濡れた翼の重さなど何とも思わない。そして、千尺の寒松の頂にたどり着いた時、疲れなどすっかり消え去つてゐるはずだ。今まで飛び続けて来た労苦は跡かたもなく消えている。』

(13) 底心ハ水遠ー垂トハ、……大儀ナヲモ不知也『A句、私は師家として学人の接化に明け暮れてきた(今私は、少し疲れていて、禪者としてあるべき姿を見失いがちだ)。B句、本来の家郷に帰ろう、今こそ帰家穩坐すべき時だ。C D句、そう思えば、凡庸な衲僧ども勘弁し導く苦惱と失望とを忘却できる。』

(14) 又水遠ー垂トハ……此トキハ位低キナリ『別の解釈によれば、A句は、修行に専心している様をいい、B句はひたすら本分(悟り)

へと向かう様を頌出している。C句、ひたすら悟道を求めて余念が無いので、つらいなどとは思わない事をいい、D句、なぜなら何が何でも悟りの境地に到達したいが為であるとする。この解釈は、注(13)の解釈に比べて、この頌の主人公を師家の立場から修行者の

それとして解釈しているのは、悟りの境界というレベルでは低いとする。「龍門文庫本」には、「此頌、曹洞宗ノ沙汰スル頌也。云々」とあり『夾山鈔』においては、「曹洞五位」説に基く解釈が見える。

0070 湧壁観音

【京大本略註】

(70) 湧壁観音

湧壁者、壁上^ニ塑^シ着^ス観音ノ像^ヲ也。湧壁、羅漢并諸天ノ像、太元ノ寺々^ニ有^レ之。或^②云、壁上^ニ図^ル観音像、如^ニ湧出^一也。又雲中^③、

A 三千刹海無^{キヨコゴツク}虚^ニ応^一

B 三十二身常^ニ互^ニ融^一

C 昨夜蝸牛耕^ス破^ス壁^ヲ

D 出^テ円通^ニ又入^ル円通^ニ

無^④虚^ニ応^一者、經云、十方諸国土、無利不現身。首楞嚴、仏勅^⑤文殊^⑥揀^ム二十五円通^ヲ、以^テ観音、為^ニ円通^一二十五之第一也。古語^⑦云、蝸牛鑽^ル壞壁^一。蓋湧壁ノ像出^ニ半身^ヲ、如^ニ蝸牛^一出^ル殻^ニ也。就^⑧牛^⑨字、云^ニ畊破^一也。或^⑩云、以^ニ機事^一出^{セシム}入^ル大士^ノ之像^ヲ也。恐^ハ非^ニ是^一。

【欄外注】

蛤蜊^⑪観音、蝸牛亦然。

【校異】

也。一也。蛤蜊^⑫観音、蝸牛亦然。

【大義寫本】

(70) 湧壁觀音

蝸角^①、壁上、其路如觀音像。号之曰湧壁——。或云、壁上觀音像上、蝸牛往復乱文未分曉、壁上圖画如涌出者也。

A 三千刹海無^レ虛^レ庇^一

B 三十二身常^ニ互融^ス

C 昨夜蝸牛耕^ニ破^ス壁^一

D 出^ニ円通^一又入^ニ円通^一

十方諸国土、無刹不現身。又^②庇以仏身得度者、即現仏身、三十二^③心身也。古語、蝸牛鑽壞壁。夫湧壁上塑著觀音像、露出半身者也。其猶蝸牛出舍、取縁語喻之、蝸牛入舍出舍、謂之入円通出円通也。湧壁觀音、湧壁羅漢、并諸天大元寺々有焉。日本未見之。

【欄外注】

坡詩、腥涎不滿腹、聊足以自^④儒、昇高不知休、^⑤竜作粘壁枯。

稜巖、仏勅文殊揀二十五円通、觀音円通第一也云々。耕字、就牛字用之。

【略註抄】

(70) 湧壁觀音

『江湖風月集略註』研究(五)(飯塚・佐藤・比留間・堀川)

壁ニ泥ヲ以テ觀音ヲ作り付ケタガ、涌キ出ルヤウナトモ云ゾ。又雲中カラ湧出ノ貌ヲ壁上ニ画タトモ云ゾ。^⑥又壁上ニ蝸牛ノ跡ノアルガ、觀音ノ像ノヤウヂヤトモ云ゾ。

A 三千刹海無^レ虛^レ庇^一

此觀音ハドコヘモ出タガ一処デモアレ、ムダニハ出ヌゾ。

B 三十二身常^ニ互融^ス

普門品ニ三十二身ガアルゾ。其根機ニ随テ現スルゾ、ドコヘ現ジタモ一身ヂヤホトニ互融ゾ。

C 昨夜蝸牛耕^ニ破^ス壁^一

蝸牛ガ壁ヲキリ破テ、ネタクリ回ツタガ、殻ヨリ出テツ入ツシタハ、

D 出^ニ円通^一又入^ニ円通^一

デハ無イカ。耕破ハ牛ノ字ニ付テ云也。出トハ、化度利生ノ為ニ本際ヨリ出ルナリ。入トハ、化度了テ又本際ニ入ルナリ。蝸牛ヲ云ハ、蠢動含靈同一法性ノ義也。

註 機事^⑦アヤツリ也。

【70】註

(1) 湧壁……寺々有之。湧壁観音の解釈その一、壁上に塑像のごとく観音像を作るとするもの。元の寺に一般的に見られるという。大義写本もこの説を記し、かつ同本は日本にこの例は未見であるという。『襟帯集』に瑞溪周鳳の語を引いて「瑞溪曰、只壁ニ打著テ雲ノ様ニシテ観音ヲツクリツケタカ、ソコカラ湧出シタソ」と記すのはこの塑造観音像に同じものか。

(2) 或云……如湧出也。湧壁観音の解釈その二、壁から湧き出るように作図された観音像のこと。

(3) 又雲中……壁上也。湧壁観音の解釈その三、雲中より湧き出るように壁上に作図された観音像のこと。

(4) 無慮応……不現身。『妙法蓮華經』卷七「觀世音菩薩普門品」に「觀音妙智力、能救世間苦。具足神通力、広修智方便。十方諸国土、無刹不現身」(大正藏九・五八a)とある。観音の衆生済度のために応現する能力が、遺漏なく遍く行き渡ることを言う。「夾山抄」に「第一ノ句、無^レ慮^ハ虚^ハ応^者、若^シ有^レ人^一念^ニ唱^フ南無^ト、則^レ無^シ不^レ云^{コト}ト^ハ應^セ也」と見える。なおAの「三千刹海」について、本詩(51)「贈裁縫」にも同じ語が見え、そこで「京大本」は「刹^ハ者^ハ梵語、正^ニ云^フ刹^ノ摩^ハ。此^ハ翻^ス土^ノ田^ト」と注している。なお(51)注(3)参照。

(5) 首楞嚴……第一也。『首楞嚴經』(大正藏一九)にこれと同文は見えない。但し同経卷五く六に、これに対応した内容が見える。すなわち二十五円通とは、仏が楞嚴会上に於いて菩薩声聞に對し、い

ずれの法に依つて円通を得るか(得道したか)問うたところ、回答された二十五種の答えであり、二十五人の菩薩声聞が各自、六塵六根六識七大に依つて各円通を説いたものである。この二十五種の円通より、仏が文殊をして選択させたところ、觀世音菩薩の依つた耳根円通を第一としたという。『首書』は略註のこの箇所について、『首楞嚴經』卷六の「經曰、於是如來告文殊師利法王子、汝今觀此二十五無學諸大菩薩及阿羅漢各說最初成道方便、皆言修習真実円通、彼等修行実無優劣、前後差別……如観音所説、譬如人靜居十方俱擊鼓十処一時間。此則円真実。」(大正藏一九・一三〇a-c)を該當させている。略註はこの箇所を抄出積意した他の『首楞嚴經』註書類に依つたものと考えられるが、出典は未詳。なお二十五円通は、BまたはDに触れて挙げたものと思われるが、詩の解釈上、いづれにも有効な関連性を見出し難い。『大義写本』では欄外注に置かれ、『略註抄』では、これに触れていない。

(6) 古語云……鑽壞壁。蝸牛の行跡が壁を鑽り破っているように見えることを言う。この句、『大義写本』にも見えるが出典未詳。

(7) 蓋湧壁像……出殻也。観音像の造作と、蝸牛がその半身を殻より露出している相似を言う。

(8) 就牛字云畔破也。畔と牛が縁語であることを言う。この指摘は『夾山抄』にさらに詳しく、蝸と壁の關係にも触れて、次のように記す。「第三ノ句、畔^ハ破^ラ壁^者、有^ル角^ノ故^ニ言^フレ^ハ蝸^ノ牛^ハ。蝸^ノ之^ノ行^ク処^ハ、引^クレ^ハ涎^ヲ之^ノ痕^ト、如^シ三^ノ牛^ノ畔^スレ^ハ時^ハ、有^ニ鋤^ル犁^ノ之^ノ痕^ト。又畔^ノ字^者、

牛ノ之縁語^{ナリ}也。特地ニ用^ユ蝸牛ノ字^ヲ意^ヲ。蝸^ハ者壁ノ之縁語^{ナリ}也。

(9) 或云……恐非是。湧壁観音の解釈その四として、あやつり仕掛け様のもの(機事)を挙げるが、略註はこの説を否定している。

(10) 蛤蜊観音蝸牛亦然。蛤蜊観音は三十三観音の一。中国成立の観音。「景德伝灯録」卷四「終南山惟政禪師」章(大正蔵五一・二三四a、b)に、唐の文宗が開かぬ蛤蜊に香を焚くと、菩薩に変化したのを不審に思い、惟政に質したところ、その答えに感心して天下の寺院に観音像を作らせたとあり、この故事に基づく。「石溪録」下には「文宗嗜蛤蜊」頌(統蔵二・三・一三四a)がある。また蛤蜊から観音が出現するモチーフとして画題に用いられることが多かった。

(11) 蝸角……如涌出者也。湧壁観音の解釈その五、蝸牛の行跡(路)が観音の図像のように見えるものを言い、或いはその行跡が、判読できない乱筆のようで、そのさまが観音が湧き出るとき模様に見えることを言う。蝸牛の行跡を画や文字に喩える例は、『古今事文類聚後集』卷五〇「蝸牛」項に、「詩句 蝸涎畫面梁 杜牧之。断墙着雨蝸成字」と見える。

(12) 又応以……三十二応身也。観世音菩薩が衆生の根機に随って三十二の化身を示すことを言う。『妙法蓮華経』卷七「観世音菩薩普門品」原文では、「若有国土衆生应以仏身得度者、観世音菩薩、即現仏身而爲説法」(大正蔵九・五七a)とある。

(13) 其猶蝸牛……出円通也。この場合の縁語とは蝸牛の舎(=殻)に出入するということと、観音の円通に出入するということを指す。

『夾山抄』に、「蝸^ハ在^テ円殻^ノ中^ニ、随^レ時^ニ出入^{スル}者^{ナリ}也。故^ニ円通^ノ之縁語[、]用^テ之^ヲ恰好^{ナリ}也」とある。

(14) 『集注分類東坡先生詩』卷二十四「蝸牛」を出典とする。

(15) 又壁上……トモ云ゾ。湧壁観音の解釈その五、蝸牛の行跡が観音の図像のように見えることを言う。注(11)参照。

(16) 普門品……互融ゾ。『京大本略註』ではBの解釈に直接には触れておらず、『大義写本』では「三十二身」の語義を注しているだけであったが、『略註抄』では「互融」の解釈に及んでいる。観音の応現するさまは、一身にして三十二身であり、三十二身にして一身であり、その接化自在のようすを互融と言う。『襟帯集』の「普門品三十二身ガアルソ、其機根ニ随テ現スル也。互融シタ処ゾ」も同意。

(17) 蝸牛ガ……デハ無イカ。『大義写本』注(13)の意に通ずる。共通の表現は『襟帯集』にも、「昨ー其ノマハリ蝸牛ガネリマハリタゾ。蝸牛カ出入スルコゾ、円通ニ出入シタヨ」と見える。

(18) 出トハ……入ルナリ。Dの取意。観音が根本真理の本際から、衆生接化のために利生方便に出向し、再び本際に帰ることと解する。『夾山抄』に「句中^ハ以^テ蝸牛ノ出^ニ入^{スル}ヲ於^ニ円殻^ニ、喩^フ観音ノ出^レ円通^ヲ又入^レ円通^ニ也。出^ト者[、]為^メ化度^ヲ出^ニ本際^ニ之謂^{ナリ}也。入^ハ者、止^レ化度^ヲ又入^レ本際^ニ之謂^{ナリ}也」とある。

(19) 蝸牛ヲ云ハ……ノ義也。菩薩大士の観音も、小虫の蝸牛も同一法性であることを言うが、これについて『夾山抄』に江西龍派

の語を引いた次の記述がある。「以^ニ大慈大悲ノ觀音大士^一ヲ、比^ス二蝸牛ノ小虫^一、無^シ有^ルコト^ニ誘^ハ僞^ノ之罪^一耶。統云、約^スレ^モ迷情^ニ則^シ爾^リ也。約^スレ^モ理^ニ則^シ豈^ニ爾^ニ哉。自^ニ同一^一仏性^一見^レハ之ヲ、則^シ蠢動含靈^モ亦^レ觀音^ノ之体^{ナリ}也。故^ニ華嚴經^ニ云ク、心仏及衆生、是三無差別。又自^リ宗門見^レハ之ヲ、則^シ有^リ抑^下ス^ルノ於觀音^ノ之意^上。蓋^シ自^リ生仏未^レ興^ラ空劫那畔^一見^レハ之ヲ、則^シ全^ク無^シ可^レ度^ス衆生^一。咄、箇ノ觀音欲^レ度^ニ那箇ノ衆生^一哉」。

【補説】
湧壁觀音の解釈その六として、『夾山抄』並びに『首書』は、旧註に多義あるも取るに足りず、として「壁上円相ノ中ニ図^ニ半身ノ觀音^ヲ。故^ニ如^シ自^レ壁上俄^ニ出^一也。壁上^ニ多^ハ於^ニ円相中^ニ図^ス羅漢觀音等^一」(『夾山抄』、『首書』とも同文)と、円相中に作図された觀音の半身像であるという。『訓解添足』もこれにならう。『略註』にこの解釈は記されていないが、円相中の觀音像という理解をもとにすれば、蝸牛が円殻に出入するということ、觀音が円通に出入するということのいずれにも対応する。

0071涅槃

〔京大本略註〕

(71) 涅槃

事苑云、涅槃、此云大円寂。

A 尸羅城裡^{アカル}拳^二金棺^一

B 駿馬^ヲ驕^ル多^シ不^レ在^レ鞭^ニ

C 三昧^ノ火^ハ從^ル何^ノ處^一起^ル

D 二千二百有余年

尸羅城、此云角城。仏涅槃時、金棺自^テ拳^ニ遶^ニ拘尸^一那城^ニ云々。尸羅亦云拘尸那。亦云拘絺羅。駿馬——者、金棺拳^ルコト空^ニ七多羅樹、猶如^ニ駿馬不^レ勞^一鞭索^ニ而奔逸^一也。三昧^ノ火者、世尊入滅、諸弟子以^ニ香薪^一闍維、薪尽^テ如^レ故。諸弟子以^レ偈讚^{スル}曰、凡俗^ノ諸猛熾、何^ン能致^ニ火^一焚^一、願化^ニ三昧火^一、闍^ニ維^ニ金^ニ色^ニ身^一。爾時金棺從^テ座^ニ而起^テ三遶^ニ拘尸那城^一。拳高七多羅樹、化^ニ火^ニ三昧^一、自闍^ニ維其^ニ身^ニ云々。三昧火者、自身之定火也。二千二百——者、涅槃後年代也。

〔欄外注〕

若知火三昧起処、仏在世也。若也不知、則古仏過去久矣。

〔出典〕

未詳。

〔校異〕

*那一羅

〔大義寫本〕

(71) 涅槃

尸羅——仏涅槃地也。以金棺譬駿馬也。又駿馬、涅槃経、立三根駿馬、見策影面光、以之為上根矣。又駿馬指意馬也。三昧火身之定火也。

A 尸羅城裡拳^ア金棺^ニ

B 駿馬^{メウリ}驕多^{シテ}不在^レ鞭^ニ

C 三昧^ノ火從^リ何^{ユウ}處^ニ起^ル

D 二千二百有余年

仏於拘尸羅跋提河辺沙羅双樹間、二月十五日夜半入涅槃。人天悲感、具金棺槨、千甕纏裹、積香為薪。仏母摩耶、從忉利天降下悲泣。金棺拳空七多羅樹、為母說法苦空無常云々。然後荼毘、香薪燼了、金棺如故。法

『江湖風月集略註』研究(五)(飯塚・佐藤・比留間・堀川)

弟子偈曰、凡俗諸猛熾、何能火熱、願化火三昧、闍維金色身。仏化三昧火自焚、舍利八斛四升。從仏涅槃至今、二千二百有余年也。自拳金棺譬駿馬驕逸不勞鞭策而奔驟也。

〔欄外注〕

尸羅——此云角城。金棺自拳邊角城云々。

〔略註鈔〕

(71) 涅槃

A 尸羅城裡拳^ル金棺

此云^レ角城也。仏ノ母摩耶夫人ハ、是ヨリ先キ生天シテ忉利天ニ居ラレタガ、仏ノ涅槃セラレタトテ忉利天ヨリ降下セラレタゾ。トキ仏ノ金棺モ空ニ飛上ルナリ。

其後我ト仏ノ火テ焚ケタゾ。是ヲ化火自焚ト云ゾ。金

棺ガ拳タホトニ金棺アガルトモヨムゾ。又仏ノ中ニ居

テ拳ケラレタホトニ金棺ヲ拳グトモヨムゾ。

B 駿馬^{メオカリ}驕^{シテ}多^シ不^レ在^レ鞭^ニ

仏ノ金棺ノ空ニ拳リタルハ、駿馬ノ不^レ鞭ニ我レト驕テ

飛出ルガ如クゾ。

C 三昧^②火^②從^②何^②處^②起^ル

化火自焚ノ火ハドコヨリ起タゾ。起處ヲサヘ識得シタ

ラハ。

D 二千二百有余年

今ニ至テ三昧ノ火ハ滅セヌゾ。又三昧ノ火ヲ見付ズシ

テ仏ハ過去セラレタナト、云バ、二千二百有余年遠而

遠キゾ。

【71】注

(1) 事苑云涅槃此大円寂。『祖庭事苑』卷六「涅槃」の条に「此云大円寂」(統藏一一三・八八c)とある。涅槃がニルヴァーナの音訳であるのに対し、大円寂は意識である。『添足』には「東陽之本無此註」とあり、増補された注のようである。(141)に同題の偈「涅槃」がある。

(2) 尸羅城此云角城。釈迦入滅の地。『祖庭事苑』卷六「拘尸焚燎」の条に「拘尸、此云角城。城有三角、故以名焉。」(統藏一一三・九五c)とある。

(3) 仏涅槃時……拘尸那城云々。A句への注。釈尊の涅槃の際に、遺体を納めた「金棺」が高く拳がつて尸羅城を巡った。『大般涅槃經後分』卷二に「爾時如来七宝金棺徐徐乘空、從拘尸城東門而出、乘空右繞入城南門、漸漸空行從北門出、乘空左繞還從拘尸西門而入、如是展轉還三匝已。乘空徐徐還入西門、乘空而行從東門出、空行左繞入城北門、漸漸空行從南門出、乘空右繞還入西門、如是展轉還經四匝。如是左右繞拘尸城經于七匝入城」(大正藏二・九〇七b)とある。龍門文庫本には、『大藏一覽集』巻一が引用されている。

(4) 尸羅亦云拘尸那亦云拘締羅。A句の尸羅について、他の音写の表記を挙げる。

(5) 駿馬……奔逸也。B句への注。釈尊の遺体を納めた「金棺」が「多羅樹」七本分の高さに上がり、その空中を行くさまは、鞭を使うまでもなく奔走する駿馬のようだ。注(3)で引いたように、釈尊の涅槃のさいにこのようなことが起きたことは諸書に見えるが、『景

徳伝灯録」卷一では「爾時金棺從座而拳、高七多羅樹、往反空中、化火三昧、須臾灰生、得舍利八斛四斗」（大正藏五一・二〇五c）とする。『五灯会元』卷一（統藏一三八二a）も同文である。

(6) 三昧火者……自闍維其身〓C句への注。注(5)で引いた『景德伝灯録』卷一の直前に「時諸弟子即以香薪競荼毘之、燼後金棺如故。爾時大衆即於仏前、以偈讚曰、凡俗諸猛熾、何能致火熱、請尊三昧火、闍維金色身」とある。釈尊の涅槃のさいに、弟子たちは釈尊の遺体を香薪で荼毘に付したが、火が燃え尽きると金棺はもとのままであった。弟子たちは偈を作り、普通の火では釈尊の遺体は焼けないので、釈尊自身の「三昧火」で荼毘に付すよう請うた。「闍維」は荼毘と同じ。

(7) 三昧火者自身之定火也〓C句の「三昧火」とは、釈尊が禪定したところに起こる火である。

(8) 若知火三昧……古仏過去久矣〓『略注抄』にこれと同意の部分がある。注(11)参照。

(9) 又駿馬涅槃経……為上根矣〓三根のうち上根を、鞭を見ただけで走り出す駿馬に喩えたもの。出典未詳。『碧巖録』第十八則本則評唱に「世尊云、如世良馬、見鞭影而行。」（大正藏四八・二五八b）とあるように、広く用いられた喩えである。

(10) 又駿馬指意馬也〓「駿馬」について、意馬（煩惱が治まらないことを馬に譬えたもの）の意とする別の解釈を挙げる。

(11) 仏母摩耶……為母說法苦空無常〓釈尊の涅槃の際に摩耶夫人が

天上から降下したことは、これまで引用した諸書には見えない（『景德伝灯録』『五灯会元』は「為母說法」とあるのみ）。『摩訶摩耶経』に「世尊已入般涅槃後、摩訶摩耶從天來下至金棺所」（大正藏一・二一〇一三a）とあるのに拠るか。

(12) 化火自焚ノ火ハ……二千二百有余年遠而遠キゾ〓釈尊自らを焼いた火は、釈尊自身の三昧から起きたように、自身の三昧に入るための火の元は自分自身のなかにあるはずだ、それが理解できないようでは、せっかくの釈尊の行為も遠い過去の（自分とは関係ない）出来事になってしまう、の意。京大本欄外注（注(8)）に同様の解釈がある。

【補説】

龍門文庫本に、「快古剣（〓古剣妙快）在唐之時、此頌ハ難心得」頌トテ愠恕中（〓恕中無愠）二問ハレタレハ、悦喜シテ談セラレタト也」とあり、古くから難解な頌と見られていたようである。

0072 仏母堂

【京大本略註】

(72) 仏母堂

周氏^①産ス五祖^②。就^③其宅^④造^⑤堂^⑥。名^⑦仏母堂^⑧。指^⑨五祖ノ母周氏^⑩為^⑪仏母^⑫也。^{*}睦州ノ家^⑬亦名^⑭仏母堂^⑮。何啻五祖哉。凡

A 仏母堂前戸牖開^①

B 無^②非^③編辟^④為^⑤方来^⑥

C 緑蒲蠶々^①春風^②裡

D 誰着^③儂家^④旧草鞋^⑤

編辟、祖庭事苑曰、辟当作^①逼。迫也。抄云、編辟是織^②鞋之謂也。繞也。又云、責義也。碧岩青州布衫話、雪豆頌云、編辟曾^③挨^④老古錐、七斤衫重幾人知。抄云、蠶々者、蒲之列生^⑤貌。儂家者、指睦州也。參寥詩、風蒲蠶々弄^⑥輕柔者、蒲葉鳴^⑦風声乎。坡詩^⑧第一、初^⑨發嘉州奏、朝^⑩發^⑪鼓闐々、西風獵^⑫画旂^⑬。

【欄外注】

① 仏母堂前、或抄云、仏母総論也。戸牖開者、三世諸仏歷代祖、出身一路也。私謂、己見也。

② 或抄云、編辟者、勘^①驗方来^②也。

③ 或云、緑蒲者、活草鞋也。

④ 或抄云、緑蒲蠶々者、便是睦州真面目也。是誰用得而親^⑤耶。

【出典】

不明。

【校異】

*陸州家—陸州母家、*是—ナシ、*第一初發嘉州奏—（以下割注）第一卷初發嘉州、
*（注末尾）—或云蒲乱貌抄云綠蒲鬘々者便是陸州真面目也是誰用得而親耶仏母堂前或抄云仏母総論也戸牖開者三世諸仏
歷代祖師出身一路也私謂已見也

【大義寫本】

(72) 仏母堂

周氏産五祖、就其旧宅造堂。謂五祖母、為仏母。何啻
五祖哉。産祖師人、可謂之仏母也。

A 仏母堂前戸牖開

B 無非^{（三）}偏僻^{（二）}為^{（一）}方来^{（一）}

C 綠蒲鬘々春風^{（レ）}裡

D 誰着^{（二）}儂家^{（一）}旧草鞋^{（一）}

此頌、用陸州編蒲之故事、恐是陸州仏母乎。陸州^{（15）}今嚴
州也。偏僻者、勘弁四方来也。汾陽^{（15）}十八問中、有探拔・
偏僻等之間也。

〔欄外注〕

鬘々者、蒲之列生之貌也。

偏僻——、蓋陸州以偏僻接学人乎。雪豆頌、偏僻曾挨
老古錐云々。

現成公案、綠蒲則是草鞋也。何劳着陸州鞋乎。

【略註鈔】

(72) 仏母堂

五祖二仏母堂ガアルゾ。是ハ陸州ノ養^レ母^{（一）}処^{（一）}ヲ仏母堂
ト云ゾ。仏祖ノ母ヲハ皆ナ仏母ト云ゾ。

A 仏母堂前戸牖開

仏母堂ノ戸牖ヲ豁開シテ置タゾ。

B 無非^{（三）}編僻^{（二）}為^{（一）}方来^{（一）}

汾陽^{（15）}十八問第五^{（二）}偏僻問ト云ガアルゾ。人ヲ、シツメテ
物ヲ問タコトゾ。今ノ意ハ偏ハ偏也。僻ハ僻也。織^{（レ）}鞋
ヲ編^{（一）}僻^{（二）}ト云ゾ。是レヲ抑ヘテ作^{（三）}スハ編僻^{（二）}ノ字^{（一）}ト非也。陸州
ハ鞋ヲ織テ方来ノ者^{（一）}ニ買^{（二）}ルガ為^{（三）}ニシヤウナリ。サテ蒲
鞋ヲ織テ居ナガラモ、学者ヲヲシツメテ接セラレタゾ。

C 綠蒲鬘々^{（一）}春風^{（二）}裡

綠蒲^{（15）}ノ春風ニ生シタコソ、陸州ノ蒲鞋ヨ。キツカトイ
マダアルハ。

D 誰^{（一）}著^{（二）}儂家^{（一）}旧草鞋^{（一）}

此蒲鞋ヲハ誰ガ著フゾ。著ル底ハ無ゾ。儂家ハ陸州ヲ

云也ト云ハ、睦州ノ本意ニ叶フ底ノ無イヲ云也。又戸牖開トハ、三世歴代モ此仏母ヨリ出タホトニ、戸牖開クト云也。如此出世スルハ方来ヲ接センガ為也。

（172）注

（1）周氏産……仏母也。『仏祖統紀』卷三十九、唐貞觀二十二年（六四八）条に「四祖信禪師居破頭山。有老僧号栽松道者、請曰、法道可得聞乎。祖曰、汝老矣、使有所聞何能広化。能再来吾尚可待。乃去行水辺。見周氏女浣衣。揖求寄宿帰而孕。父母逐之。日庸紡里中、夕宿衆館。及生一子棄水中。明日見汭流而上。氣盛体潔、遂拳之。常随母乞食、見四祖於黄梅道中。祖語其母令出家。是為弘忍禪師。嗣居東山大行其道。衆館後為仏母寺」（大正藏四九・三六六b—c）とある。栽松道者が四祖に法を聞いたが、年寄りに説いても広く化度することはできないと断られた。そこで水辺で洗濯をしていた周氏の娘に一夜の宿を求め、妊娠させた。父母はその娘を追い出したため、昼は糸紡ぎをし、夜は宿屋で寝た。出産すると川に捨てたが、翌日また川を遡上して戻ってきた。元氣できれいだったので、またすくい上げた。いつも母に従って乞食しているところを四祖が見かけ、出家させた。これが五祖であり、母の住まいだった旅館は仏母寺となったという。同書卷二十九には「栽松道者、託胎周氏女事、已備載通塞志」（二九一c）という注記があり、道者の生まれ変わりとする。この転生については諸書に見えるが、上記のような詳細な経緯を記すのは、他に『林間録』卷一（統蔵一四八・二九五d）があり、「〇163五祖栽松」の注に引かれる。『訓解添足』は『湖北名勝志』卷三を引き、（湖北省）黄州府黄梅県に五祖の仏母堂があるとする（『方輿勝覽』では黄梅県は卷四十九・蘄州に属し、四

祖山・五祖山などが見える)。東陽英朝は『少林無孔笛』『梅屋宗信大姉五七日拈香』で「入俗又入真、金沙灘頭鎖子骨。奪人不奪境、仏母堂前戸牖開」(大正藏八一・三七九b)とA句を利用している。

(2) 睦州家……仏母也〓出典不明。睦州道明(陳蒲鞋)は母を養うため草鞋を作って生計を立てていたという逸話がある(『五灯全元』卷四ほか)が、仏母堂のことは見えない。この0072では「草鞋」が出てきて、睦州の逸話を踏まえないと解釈しづらいため、このような説明になったのであろう。なお、『禪宗雜毒海』卷四に中峰明本の「仏母堂」がある。「熱鉄洋銅地獄坑、禍胎今日又重生、黃梅山下人無數、誰解門前掉臂行」(統藏一一四七七c)というものが、「黃梅山」は五祖が活躍した場所なので、これも五祖の母を指すのであろう。

(3) 或抄云……仏母乎〓出典不明だが、多くの抄物はこの線で解釈を進めている。

(4) 編辟……迫也〓『祖庭事苑』卷二に「編辟 辟、當當作逼。迫也」(統藏一一三・二五d)とある。

(5) 抄云……繞也〓編辟を草鞋を編むことと解する説で、すなわち陳蒲鞋の母と解していることになる。注(18)参照。

(6) 又云……幾人知〓編辟を追い込んで責めることと解する説で、その用例として『碧巖錄』第四十五則の頌「編辟曾挨老古錘、七斤衫重幾人知、如今拋擲西湖裏、下載清風付与誰」(大正藏四八・一八二a)を引く。

(7) 抄云……列生貌〓『古今韻會舉要』卷三十・入声十六葉の「鬣」には「毛髮鬣鬣也」「鬣鬣也」「馬額毛魚龍額旁小鬣皆曰鬣」といった説明があり、人間を含めた動物の体毛を言う。それを比喩的に植物に用いたものと考えたのだらう。しかし同音の「猯」には「猯猯風声」とあり、後出の參寥詩を含め多くの詩では猯が用いられている。風の音の擬音語かつ風になびくさまを表す擬態語とみるのがよい。

(8) 儂家……州也〓草鞋作りの睦州にひっかけて、「わしの作った古草鞋」の意とする。「家」は接尾辞「儂家」二字で一人称単数を表す。

(9) 參寥……声乎〓『苕溪漁隱叢話』前集卷五十六「參寥」に「冷齋夜話云、呉僧道潛有標置、常自姑蘇歸西湖、經臨平。道中作詩云、風蒲獵々弄輕柔、欲立蜻蜓不自由、五月臨平山下路、藕花無數滿汀州。東坡赴官錢塘、過而見之、大稱賞。已而相尋於西湖一見如旧相識」とあるように、蘇軾にも賞賛された、北宋の禪僧參寥道潛の代表作として知られる詩。

(10) 坡詩……画旂〓『東坡先生詩』卷一「紀行に収める五言排律」「初發嘉州」の第一・二句「奏」は衍字。第二句「猯」を明暦版本は「ウカス」「レウタリ」と訓じている。旗が風になびくさまを言う。

(11) 仏母……己見也〓『夾山鈔』の説。仏母とは何か、について述べたもので、それは過去・現在・未来の諸仏および歴代の祖師すべてが生まれてくる根源である、というもの。ただし、私見である、と断っている。これは、いわば建物を女性の肉体に、扉を女陰に擬

えた表現である。なお、以下欄外注のほとんどが寛永版本にも含まれている。順序や字句が異なることから、版本を写したのではなく、このような室町期写本の増補部分が版本に取り込まれたと見るべきであろう。『訓解添足』は寛永版本の「或云……已見也」全体を後人の追加とみなし、特にこの部分を「邪解也、与二句不連続也」と批判する。

(12) 或抄……方来也 注(4)(6)の解釈に基づき、あらゆる所からやってくる修行僧を接化する、ととる。

(13) 或云……草鞋也 ⅡC句の「緑蒲」をそのまま作りたての草鞋、すなわち生き生きとして働きのある禅風、ととる。D句「旧草鞋」との対照で解したものとすれば、注(17)と同じで、注(14)(19)とは異なる。

(14) 或抄……親耶 Ⅱ文字通り緑の蒲の穂が春風になびくさまととり、それこそ睦州の禅そのものであり、誰にも真似できない、とする。『夾山鈔』に引く江西龍派説に同じ。

(15) 睦州今嚴州也 Ⅱ睦州は浙江省の地名、北宋代に嚴州、南宋末に建德府となった(『方輿勝覽』卷五・建德府)。

(16) 汾陽……之間也 Ⅱ『人天眼目』卷二に収める。禅問答を十八のタイプに分類したもの。偏僻はその第五、探抜は第七で、「偏僻問 僧問芭蕉、尽大地是箇眼睛、乞師指示。蕉云、貧人遇餓飯」「探抜問 僧問風穴、不会底人、為甚麼不疑。穴云、靈龜行陸地、爭免曳泥蹤」(大正藏四八・三〇七c、ただし五山版本本文による)というも

の。『略註鈔』は注(4)(6)と同じく「人ヲ、シツメテ物ヲ問タコトゾ」とする。

(17) 現成……鞋乎 Ⅱ注(13)同様、C句を自然そのままの姿こそ悟りを象徴しており、D句の「旧草鞋」(睦州の古くさい接化)など必要ない、とする解釈。『夾山鈔』頭注では「一説ニ、三四ノ句ハ、春風ノ裡ニ緑蒲青々トシテ生ジタコソ不仮造作真草鞋ナレ、別ニ睦州ノ蒲鞋ヲ用テ何セン、ト抑下スル也。私云、日本デ作ル格コソ如此、唐人ノ作ハ其様ニ迫切ニハナイゾ」といつて否定されている。

(18) 汾陽……ラレタゾ Ⅱ汾陽十八問の偏僻問と、草鞋を編むの意とを掛けていると解釈して、広く人々に草鞋を売りながら接化した、ととる。

(19) 緑蒲……無イヲ云也 Ⅱ実は睦州の草鞋とは春風になびく蒲、すなわち自然そのものであり、その草鞋は誰も履くことができない、すなわち睦州の禅風を継承する者はいまだに現れない、との意。